



弘法大師行狀記  
二



弘法大師行狀記卷之三

大師の性まへとまろく性まへ兼我まへとき先まへを還源まへと思  
 とは種まへ語まへいまごまろく次まへ波まへふの性まへとて歳まへう迄まへく  
 精感まへありては秘門まへと得まへり文まへふの性まへみまへん  
 らしまへ赤線まへ少まへらぬらまへと成まへ神まへの人の願まへま  
 天まへ志まへふがひく大唐まへふ入まへとて得まへりまへとあり  
 法まへいふ植まへ我まへ天皇まへの法まへ字まへ延曆まへ廿三年まへ五月  
 十二日まへ大師まへ漸まへ年まへ三十一まへふと留まへ学まへ法まへ  
 勅まへ命まへ法まへ奉まへりて入まへ唐まへ乃まへ宿まへ志まへととげ給まへ入まへ大使まへ

行状記卷之三

五曜文庫



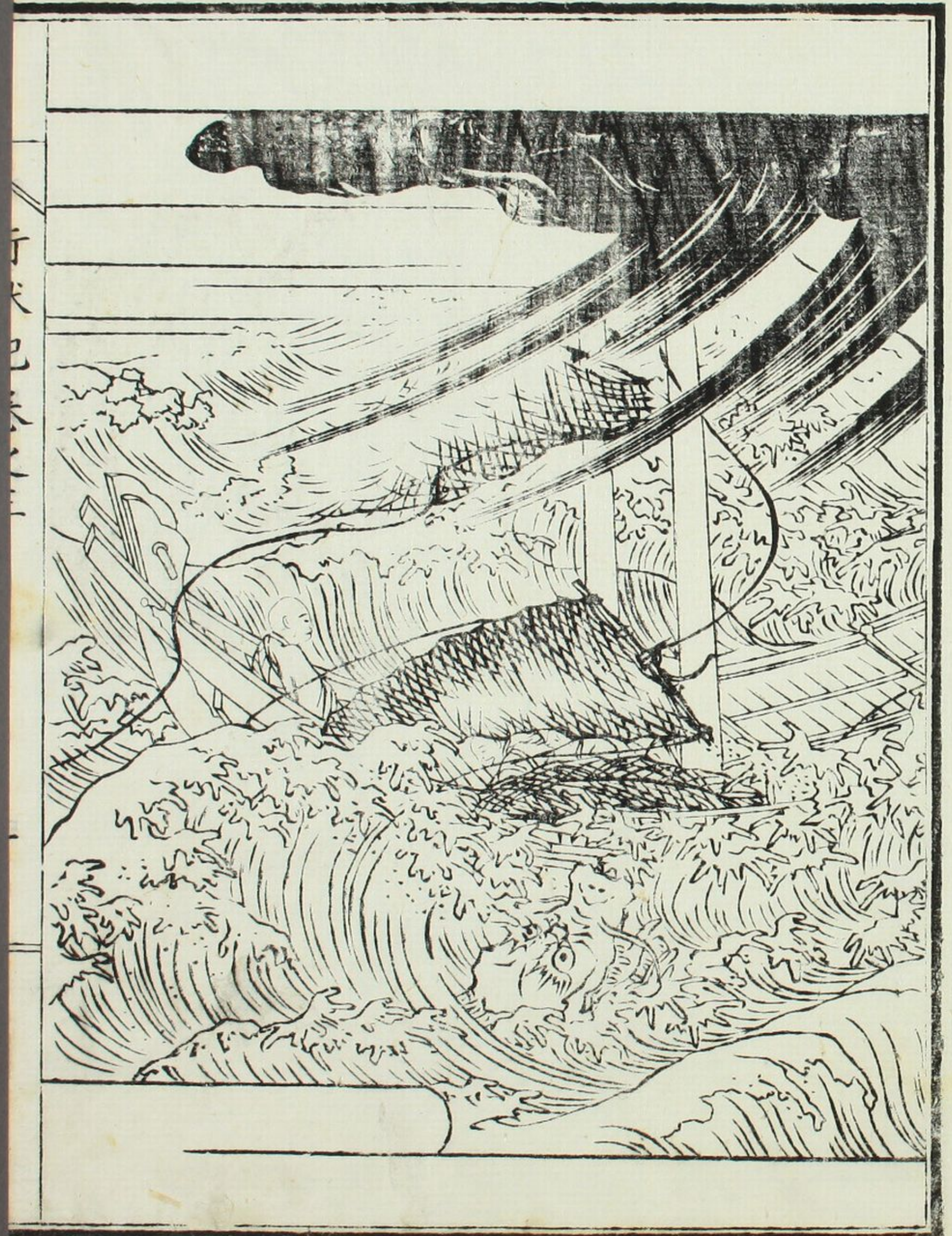
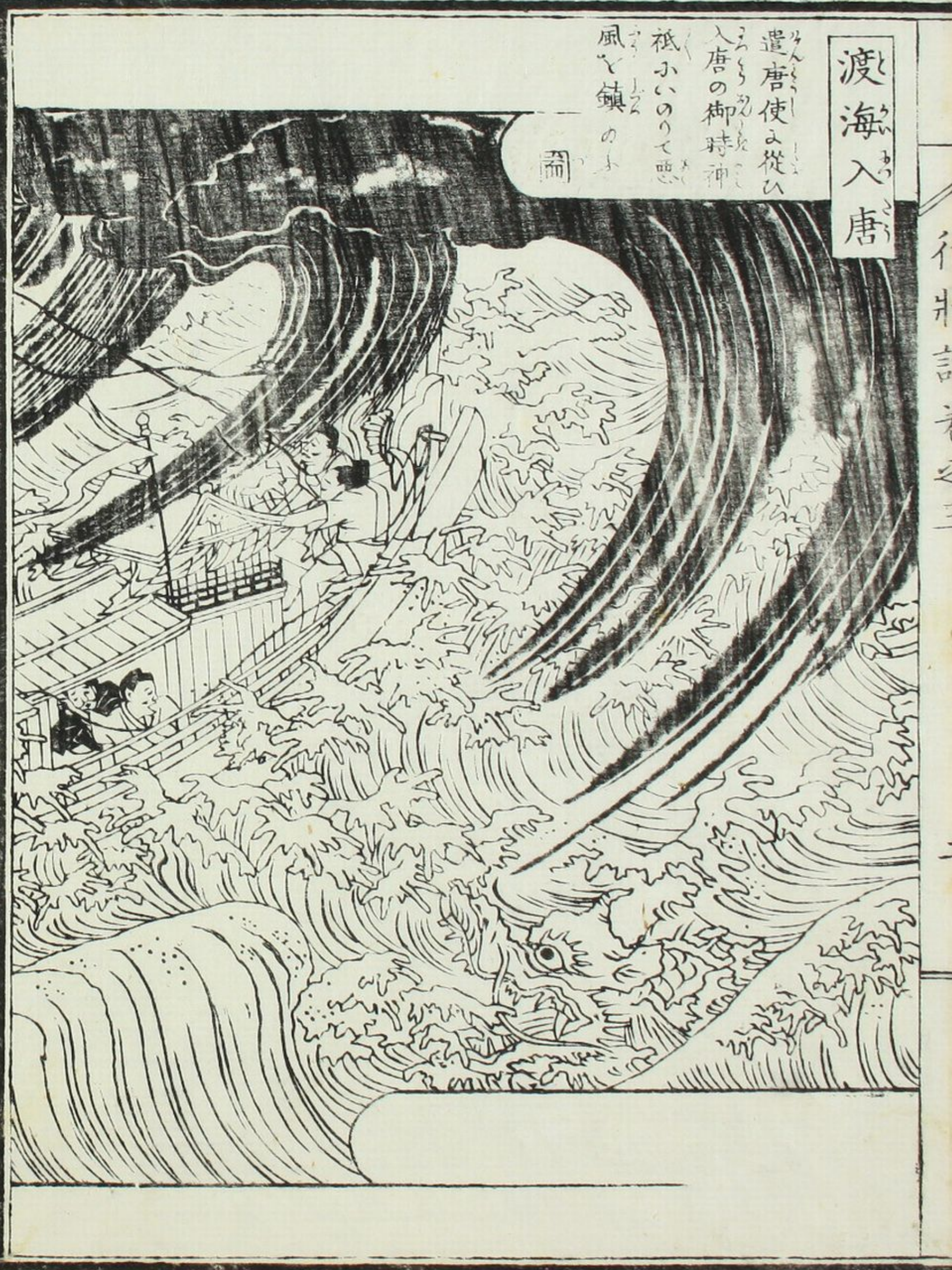
正三位後東賀能御とくえ不肥希園松浦の郡  
 たり第一の舟に於つこととえ能事以解てを發  
 せり巨舶以浮く東ふりみま一張の島嶼  
 のぞみ於中ふきえ所帆以飛して西に朽も  
 む希に美頃の烟波眼於希に極まふ葉梓  
 けうひ屋ごりぬ後會以秋の月よ築り以季  
 阿とさほし前途以曉の雲りまう務あり  
 まくに飄風俄不起く漲ぬらもふまきしを  
 洪波忽不激く容船まきしにくらぐらんをせし  
 ぐ或ら故郷ふ向ひて臨響の盟空ありまひ

車と歎き或ハ巨海ふ志らうと真龍乃腹ふ  
 ふまんと以悲む大師も眞護ふまらまら素  
 願のやげぐき事以心ふまらりて一百八十  
 七所於天神地祇ふ祈念し給ひと全別致表  
 於美文以らうし楓漢用諱ありと神おとり  
 法施しとてまらうと會さ首移むとあり誓約  
 有しうハ鐘谷の感空しわくはして水月以應  
 忽ふあらし海風や浪靜まりて八月上旬の  
 末又舟まびて福州長溪縣ふりたりたまふと  
 先例入朝の松楊蘓州ふ法まて漂蕩乃悲

渡海入唐

遣唐使み従ひ  
入唐の御時神  
祇小いのりて悪  
風と鎮のよ

而



海路の間に千里を經たりは度は  
 ざる風波は障有る七百里を越へて  
 道小し難多し奉て是を  
 大師改朝の後弘仁四年夏乃は大使藤  
 中納言賀茂卿と相共小和申の主領を果し  
 せげらまるとる也  
 雲の濤煙乃波漫とて大洋際なり  
 とも日をおくり月以途々行くとて後川の  
 岸小法きぬらの以高州乃刺史柳晃痲疾を  
 て任職以辞まふとり其新小觀察使とらる

あくに大使賀茂自ら書以法くりて州司小  
 阿ふ州長岡きとて則地よおるの友三友  
 小及とのへどもあへて返報小申す  
 船揚蘇へとははるごとて福州小到るぬ  
 あやしとて遣唐使とりふとるしをむも見  
 えざるりたる小や編小風ふしとすむ  
 うさぐし思ひく和以封じ人以お海に  
 つのうまへる砂の上ふき忽とて又河を  
 なむむふ事か一時大使大師りやさく  
 あの慈へおれびげさしとるべき謀を先

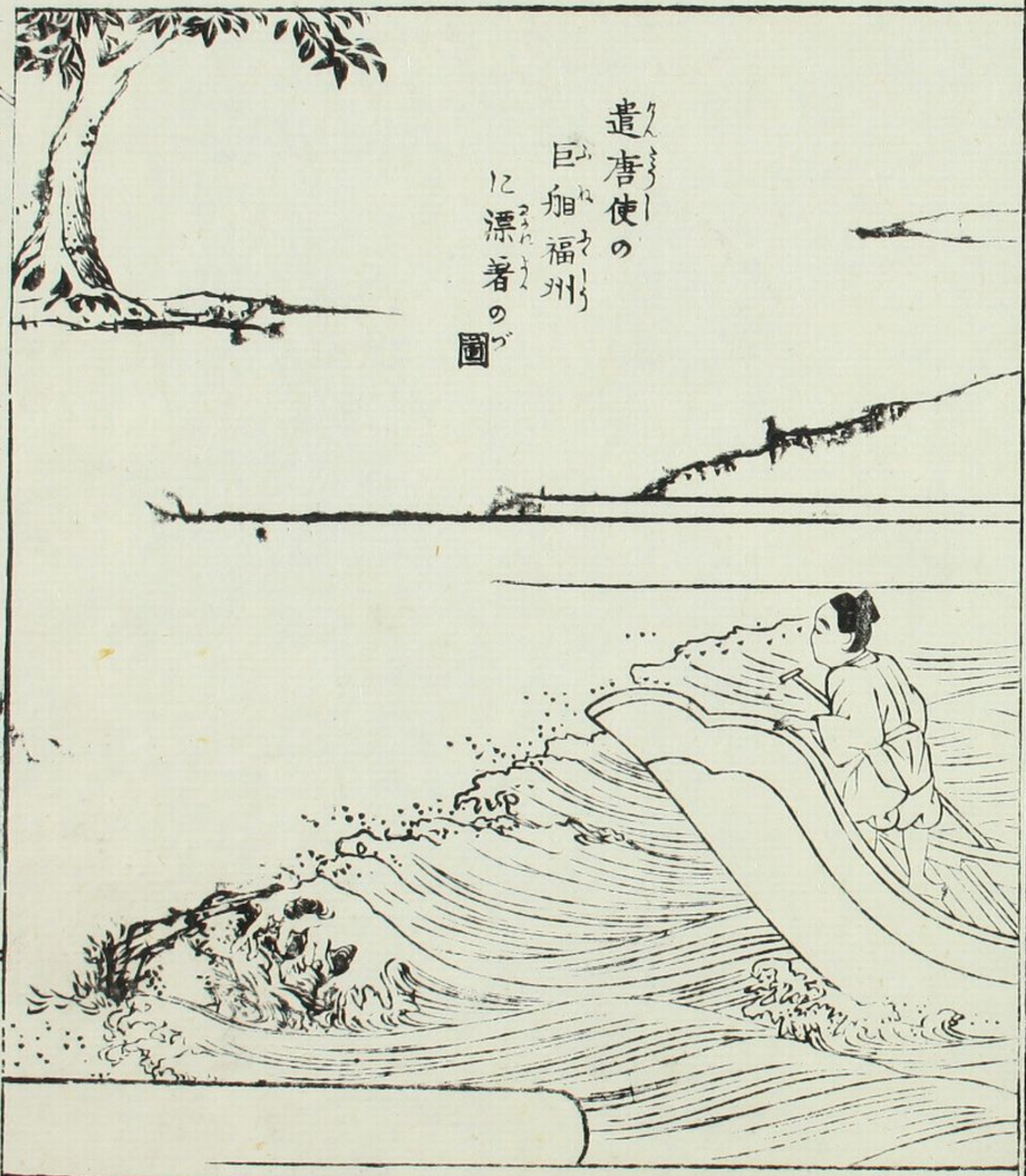
大使替書

行狀記卷之三



四

遣唐使の  
巨船福州  
に漂着の  
圖



行狀記卷之三



大師遣唐使  
に替文章と  
めさく福州の  
長又示

の圖



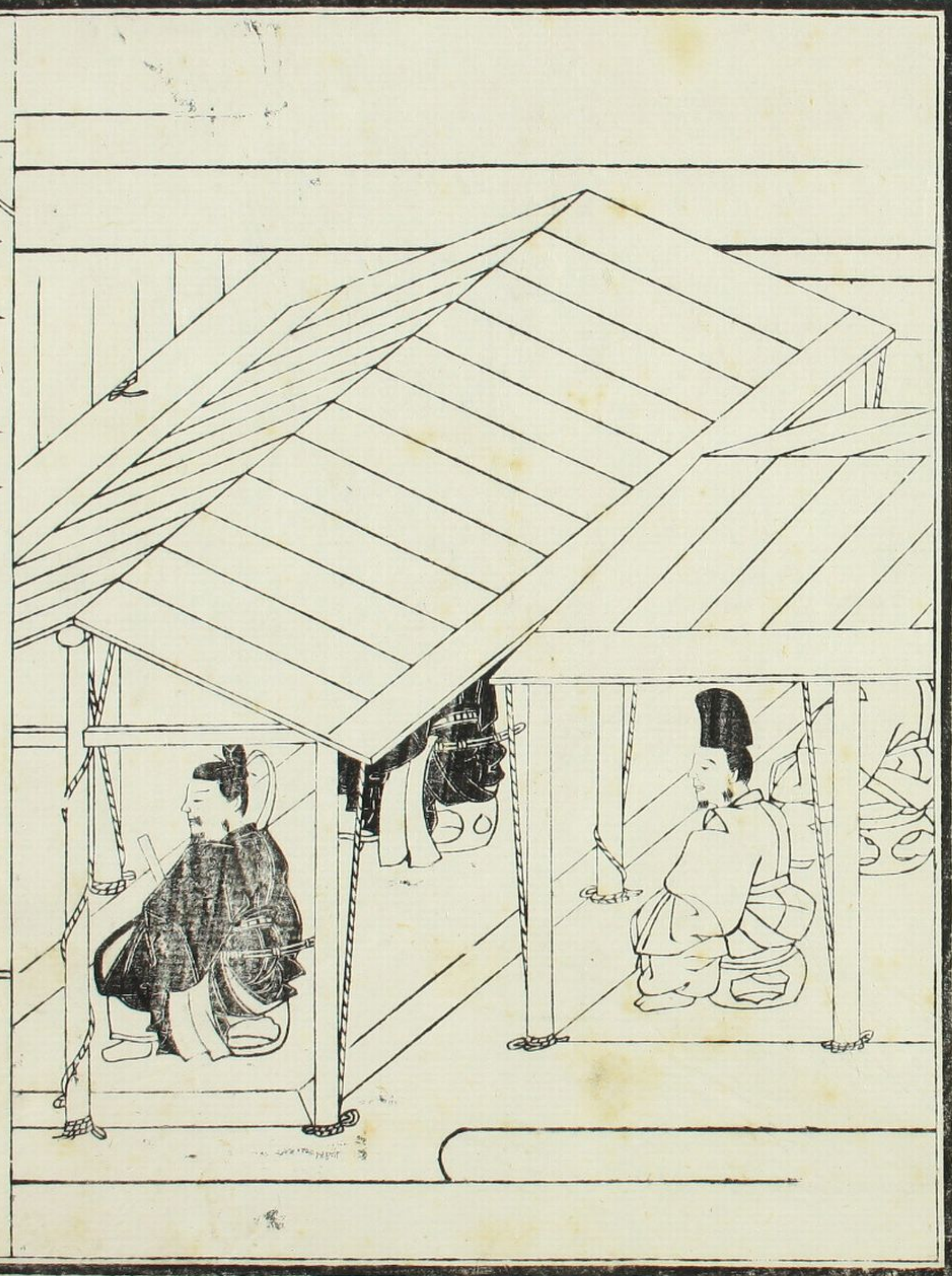
其二



大使と文筆のまゝり頼と書と題し給くと  
 あま大師書と作ると大使は習りて州乃長  
 又あ人の長林書を聞き見と候とふくみ  
 成ゆとてさふふとふとふとふとふと  
 ありて候

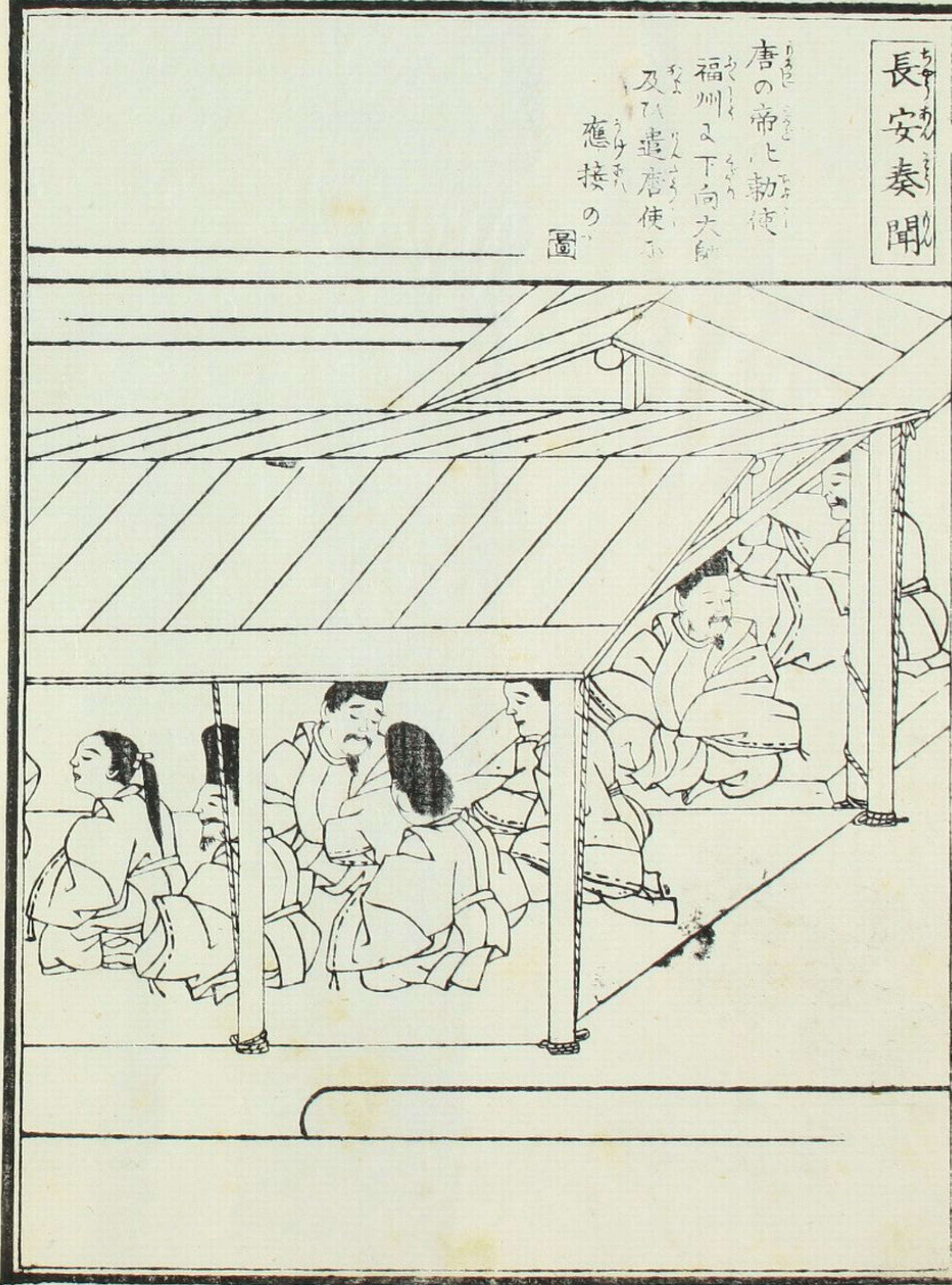
十月日大師より給て都小入む事成のそむ  
 長安小奏せし廿九日と厚く州府の力使  
 口人と給て且資糧と送り州長とみ  
 とおし給んがら又備屋十二

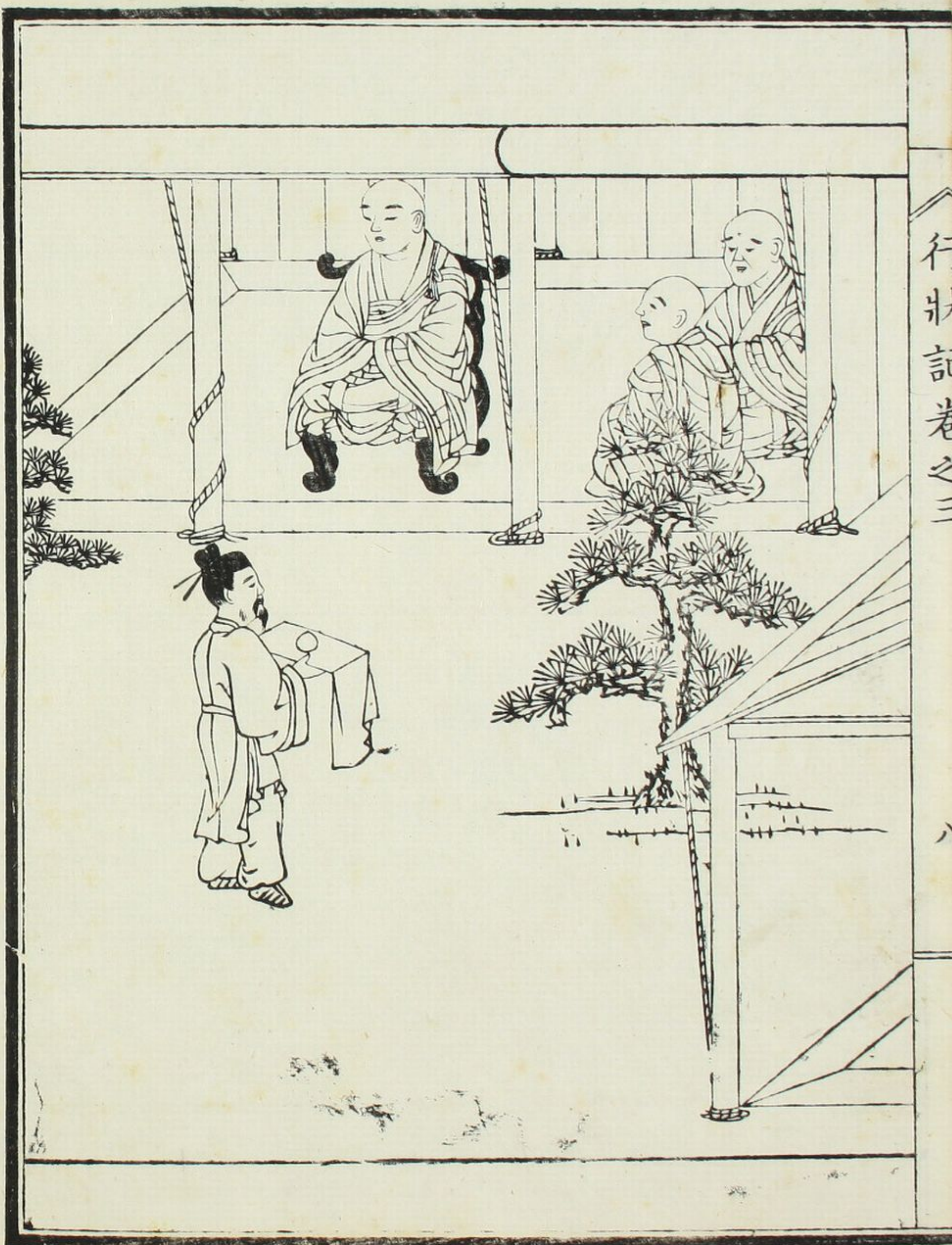




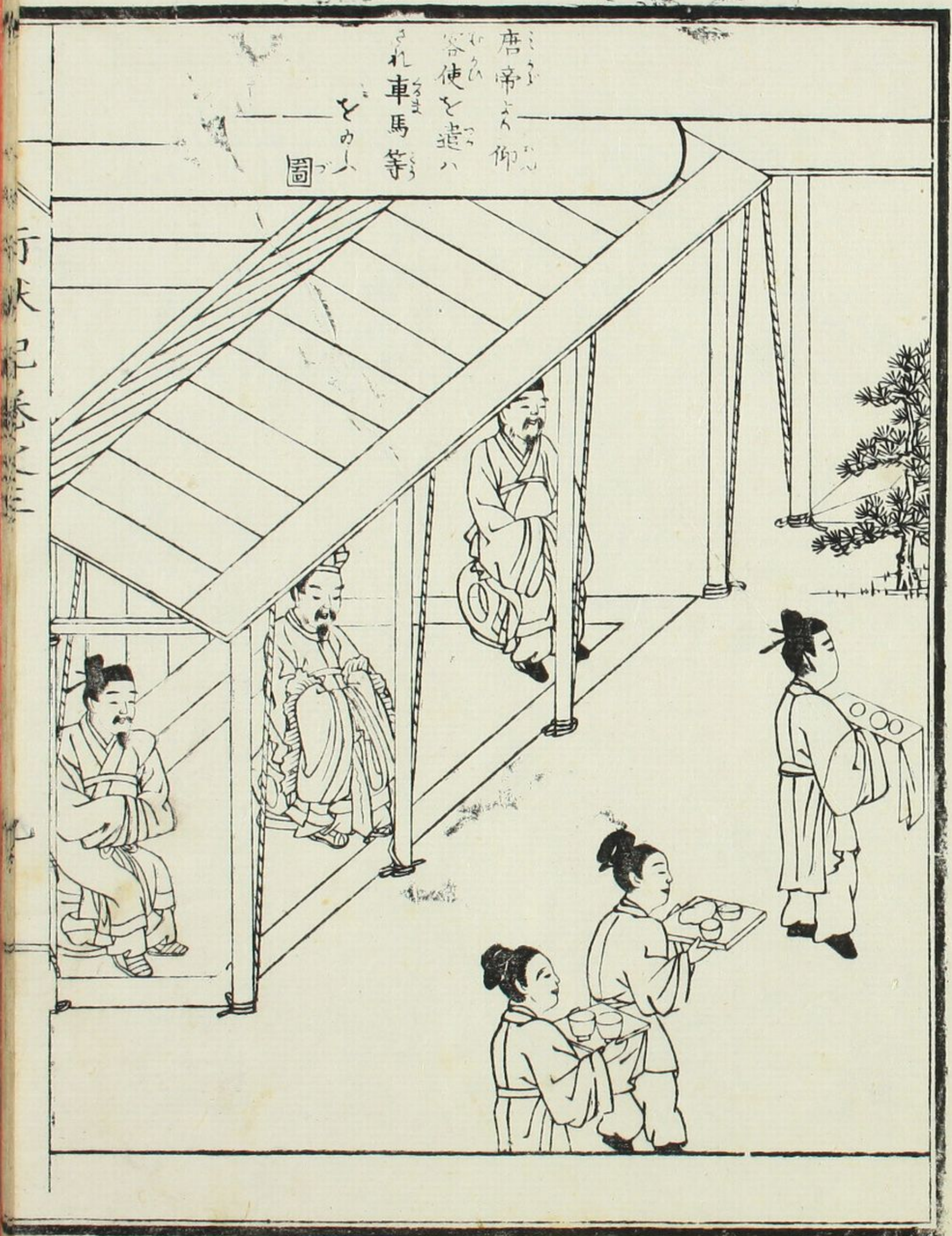
長安奏聞

唐の帝と勅使  
 福州又下向大帥  
 及び遣唐使  
 應接の圖





唐帝より仰  
客使と遣ハ  
れ車馬等  
との人  
圖





其二



其三



稠と傳りて大使並小大師と志急なるとか  
 其儀式をびおと好く若て一是をみる至密  
 瀟とながりて又作客の使とさして七珍の鞍と  
 相いゝ大使並り大師と迎へて次々の使どもも  
 皆おごまる鞍と給ふ入系は鞍と紙畫を展る  
 らるゝ一時の壯觀ふ載の美談ありやて見ふ  
 之の堵はあとも集る人市はごとく十二月  
 下旬より長安城ふ入る宣陽坊の官宅より  
 給ひたり

存問勅使



行狀記卷之三

唐順宗帝  
勅使と以て  
再大師と  
吊ふ圖

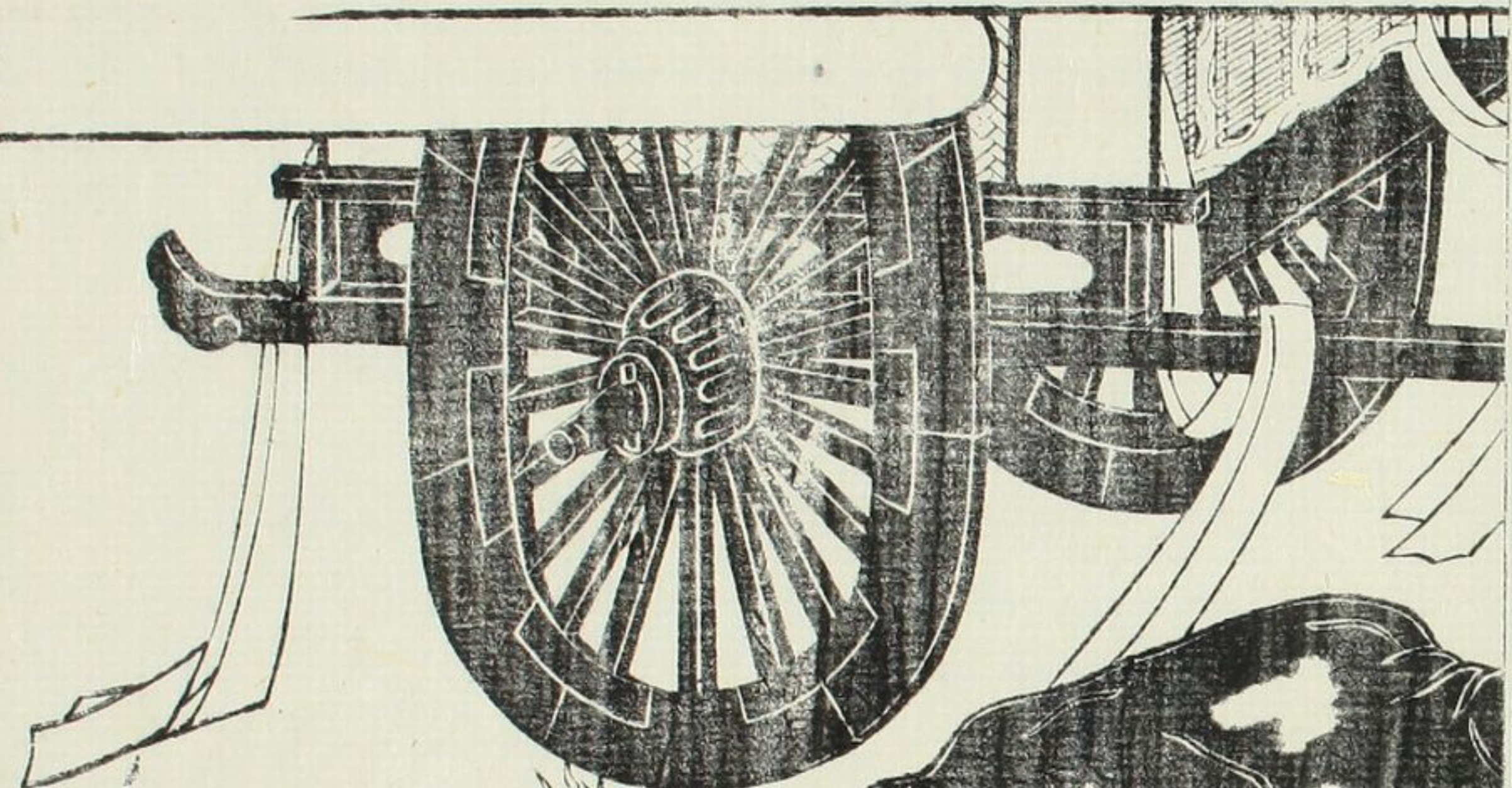


行狀記卷之三



其二





大師遺唐  
使共心  
長安城  
人  
圖

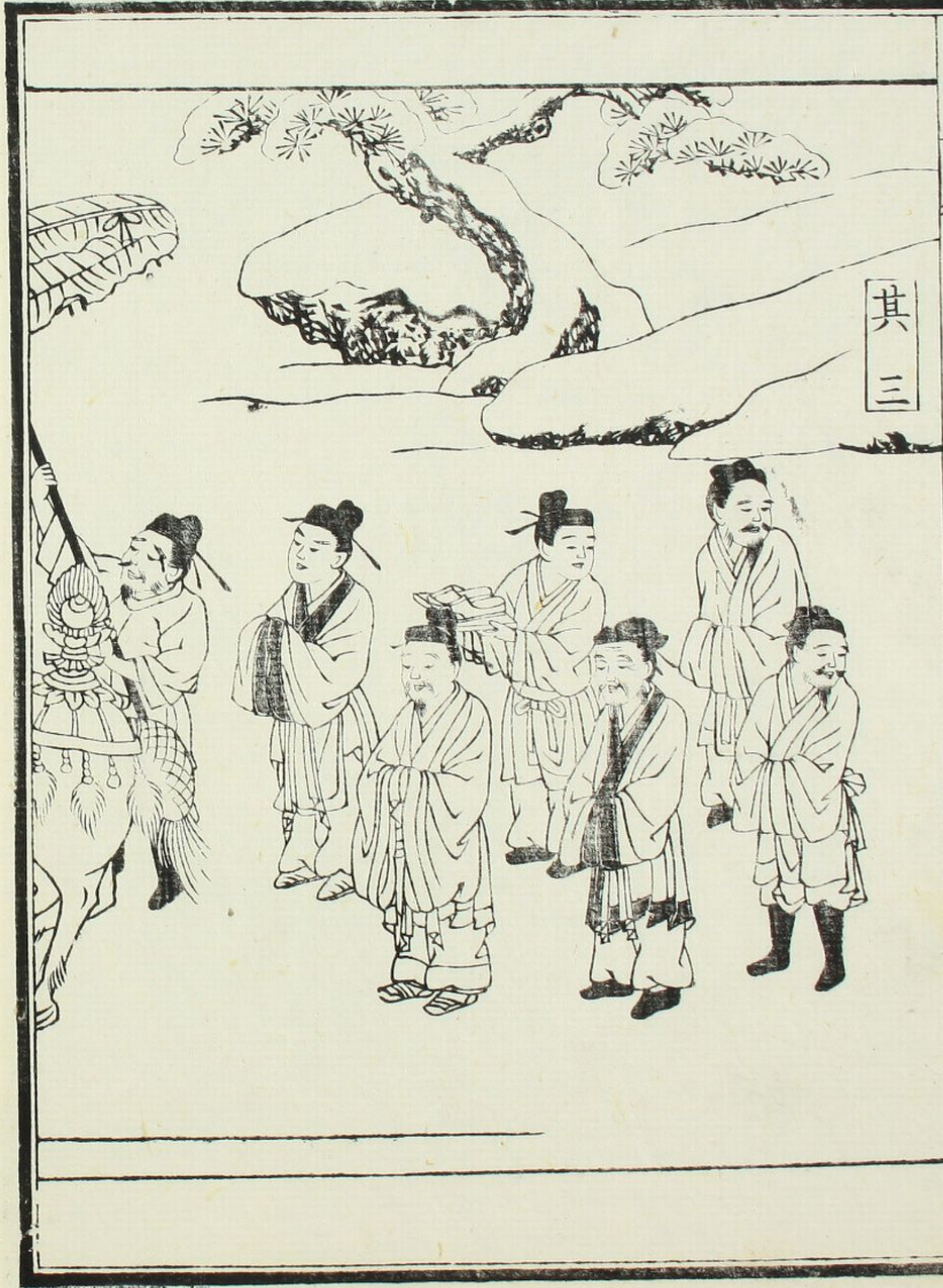






其二

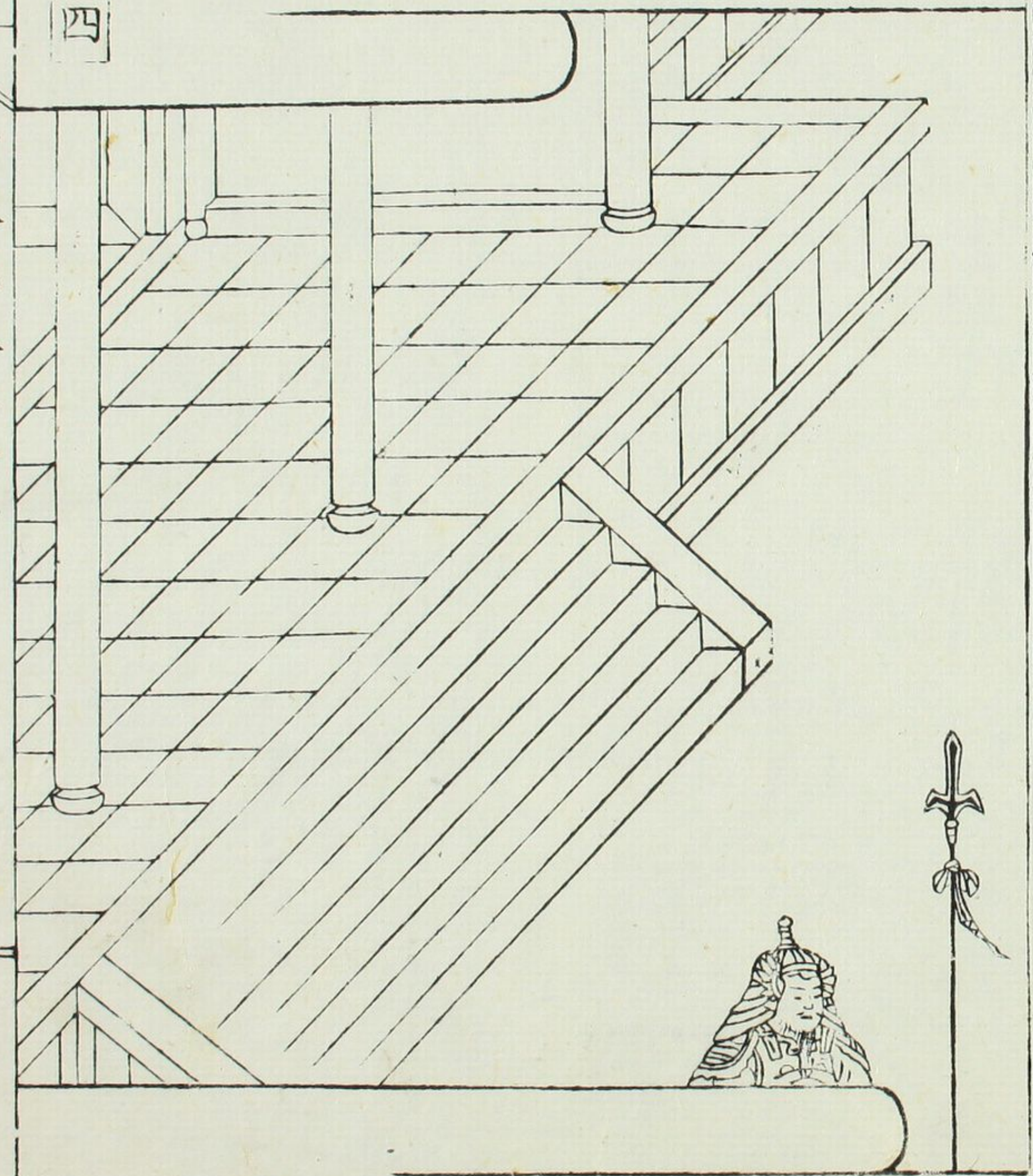




其三

其四

行狀記卷之三



行狀記卷之三

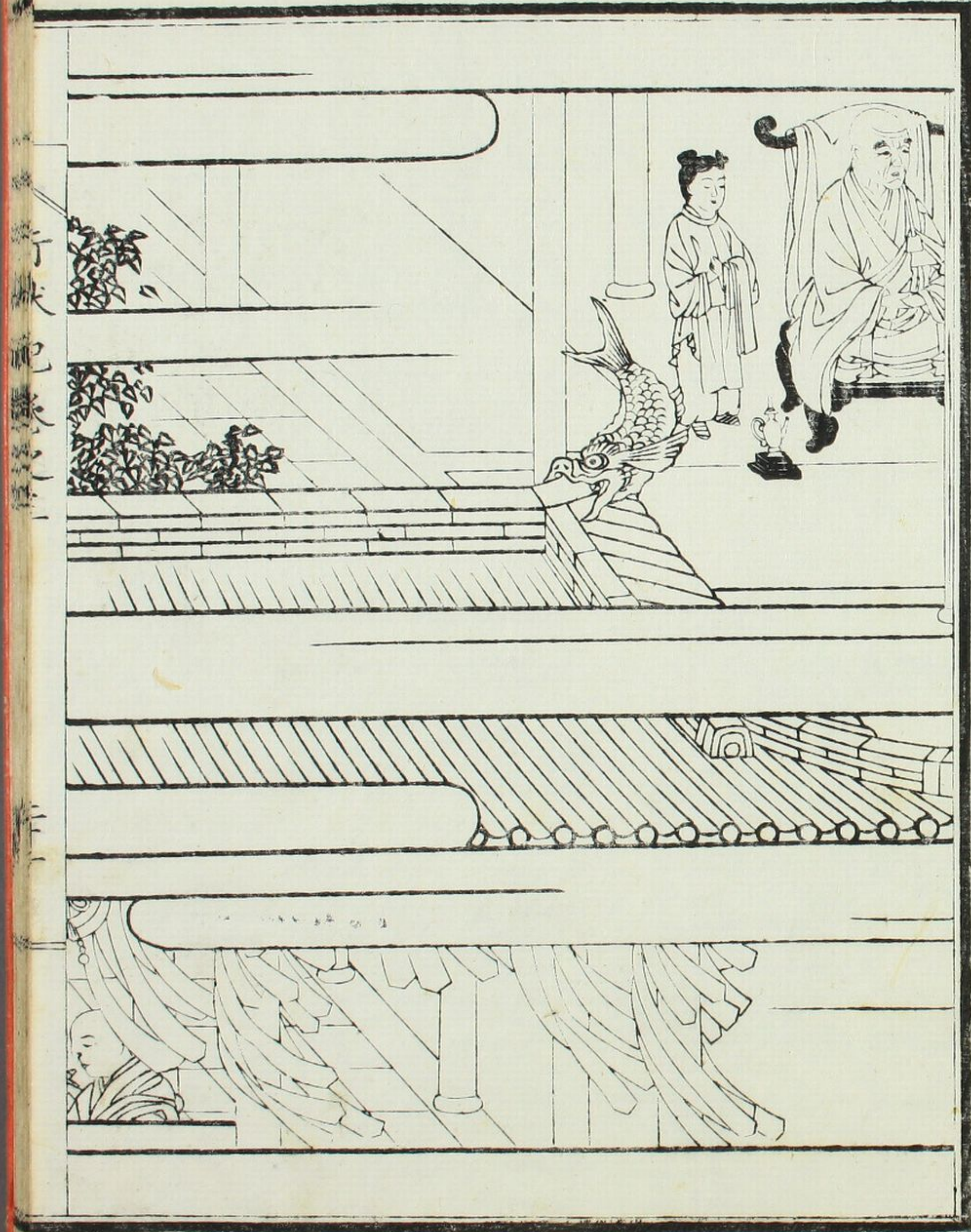
十七

唐貞元廿一年 本朝延曆廿四年乙酉二月十  
 一日大使賀正ハ報以めぐる一返朝一大師  
 兼小橋邊轉ハ 勅ふりて留学を西明寺永  
 和尙の故院に任し給き爰に城中巡り諸寺  
 小遊ぐ名徳以訪ふ師依とりと先給ふり長安  
 玄龍寺東塔院の惠果和尙の漸事と傳き  
 了明寺住持志明談徒等共六人とおたよ  
 和尙の漸をともまうぞ給り彼和尙ハ則大興  
 善寺住持不空三藏付法の上足志云大祖大毗  
 盧遮那如來七代の嫡嗣あり徳ハ惟時の尊とらそ

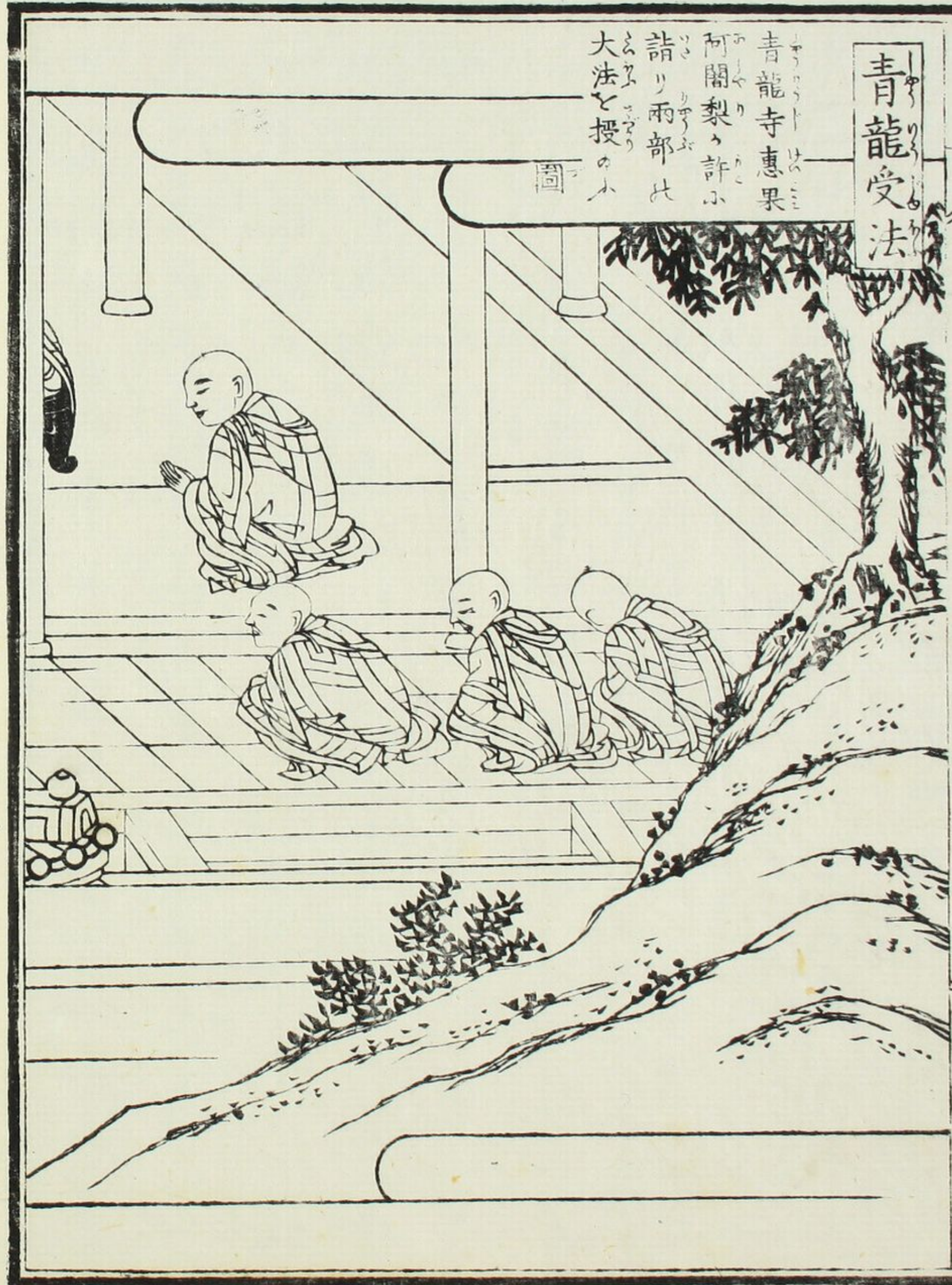
道と則帝住師あり三朝代宗徳 志云以爲く灌  
 頂と受け曰衆ある以作て密教と學を忽  
 大師乃まわつ給給ひきり以漸覽しつて  
 會と悦となしつてのこまろく容あり汝ら  
 らむ事と志を相対事と云き今日適あひ  
 らむる予以得たり大さ小はし大さより 報命書  
 かじし法と付き人か一必きみ屋より  
 名花とせふに灌頂住法とてを屋しと大師  
 則西明の本居に還りて供具とてかみ調へ  
 東塔住持舎より來り秘密の壇に入給ふ六月

上旬小大慈悲胎花の曼荼羅小の修みくわ給は  
 智水と沐し一密の法平とさづり梵字乃儀  
 軌とまかび諸尊乃瑜伽と法とさづり七月上旬  
 小更小金剛界の曼荼羅と修とまかび又智  
 の瓶水と浴し又彼妙雲用塔のあひご金薩  
 灌頂のせに衆聖嘉會の秘高法扣く諸佛  
 受戒の密壇と入給ひ一軌則とわくやせ覺  
 えく酒作は母のひふらと精誠感阿くつは  
 一よ及て投花瑞と吐に曼荼羅くわを修む  
 事と修那條壇の佳規との兆たぐふ事ありし

くバ和尙大よあやしと給ひく感歎太ふの  
 了れ遍照令別乃法号を此時よりさる  
 のを得給つり又八月上旬よりつと修法  
 阿闍梨位の灌頂とわくふまかりけ日六百の修  
 齋とまかび又阿ま修く日衆と修と給ひし  
 よ喜法興若支寺の修衆等齋修と修と修  
 く随修と修 喜法寺の修と云 日本玉の修空海宗  
 和尙を將修 佛道場供養求授胎花  
 金剛界并諸尊修 瑜伽教法云云  
 其言印契相續しと修と修と修と修と修と修  
 毛もと修習し給つり又灌頂の壇小の修み



行狀証卷之三



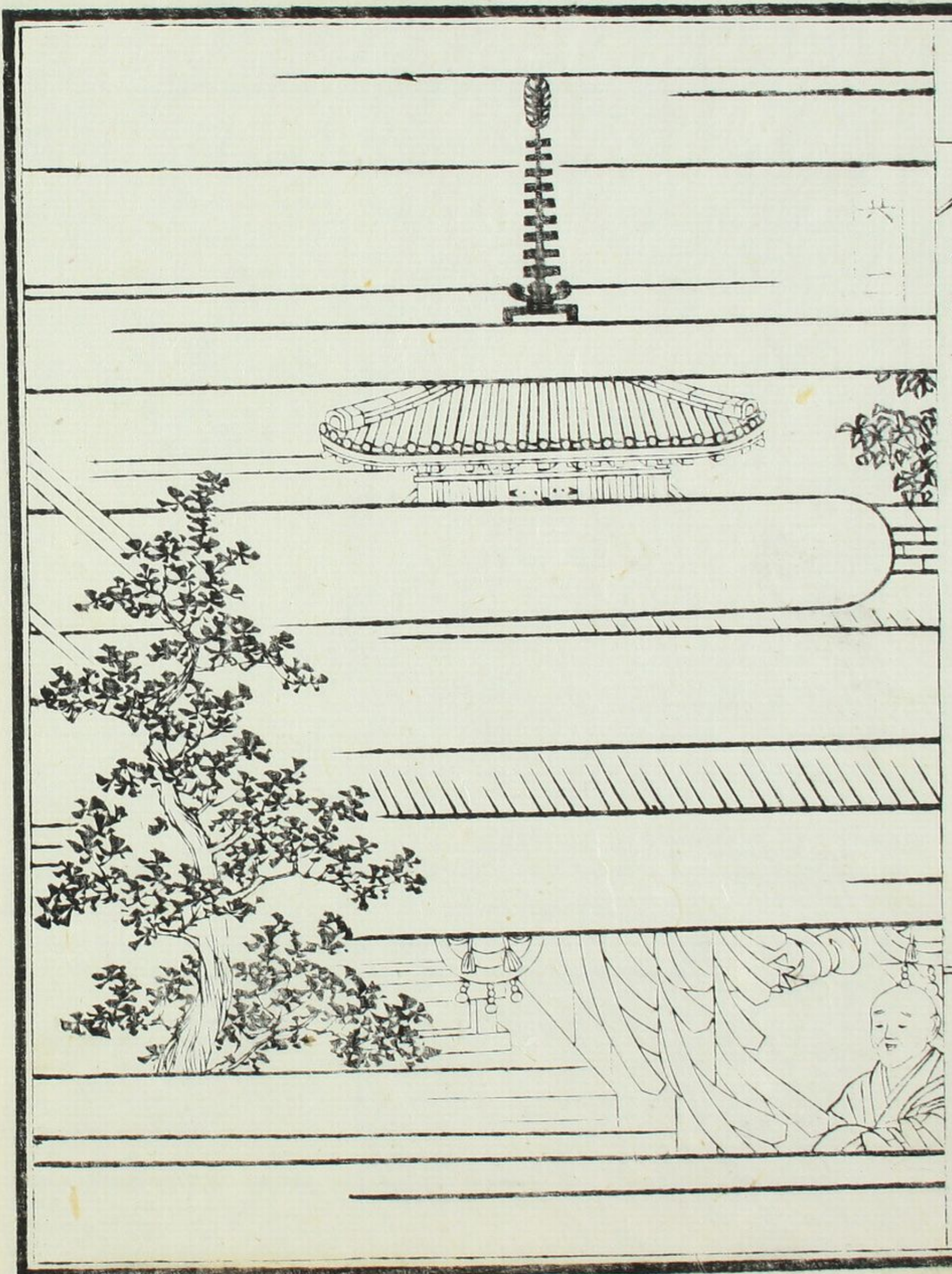
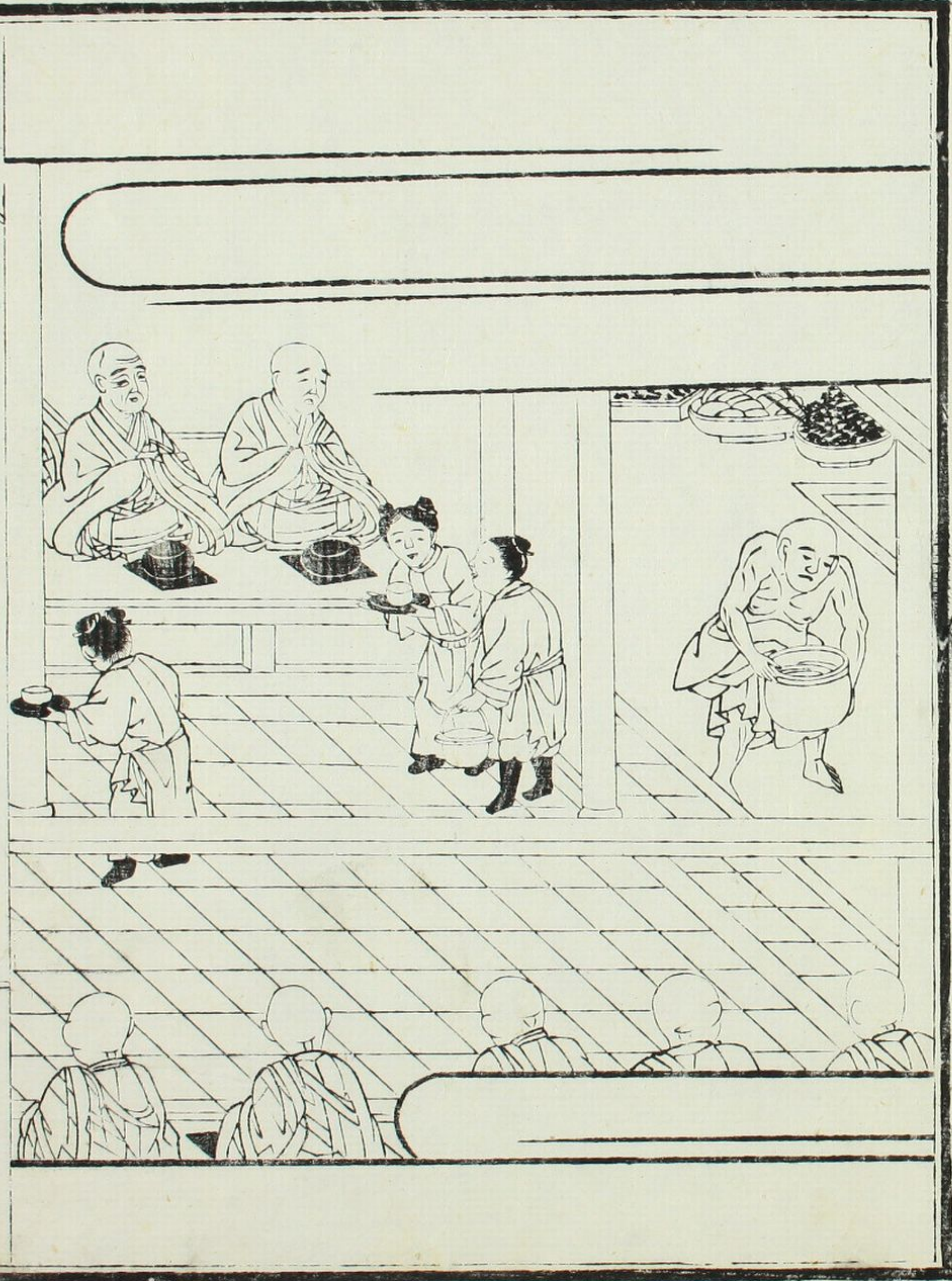
青龍受法

青龍寺惠果  
阿闍梨許  
請り兩部  
大法と授の

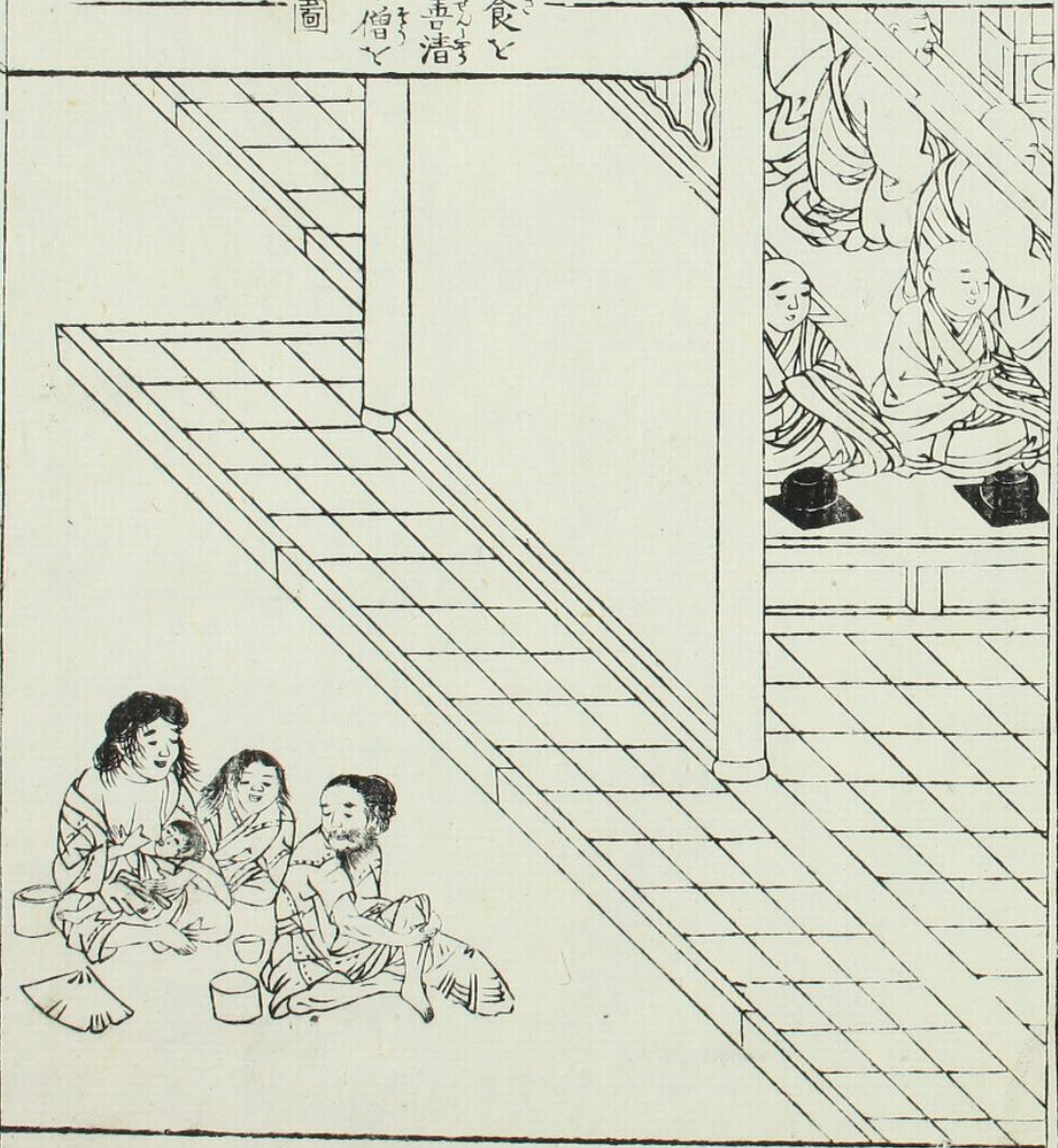
圖

行狀証卷之三

二十

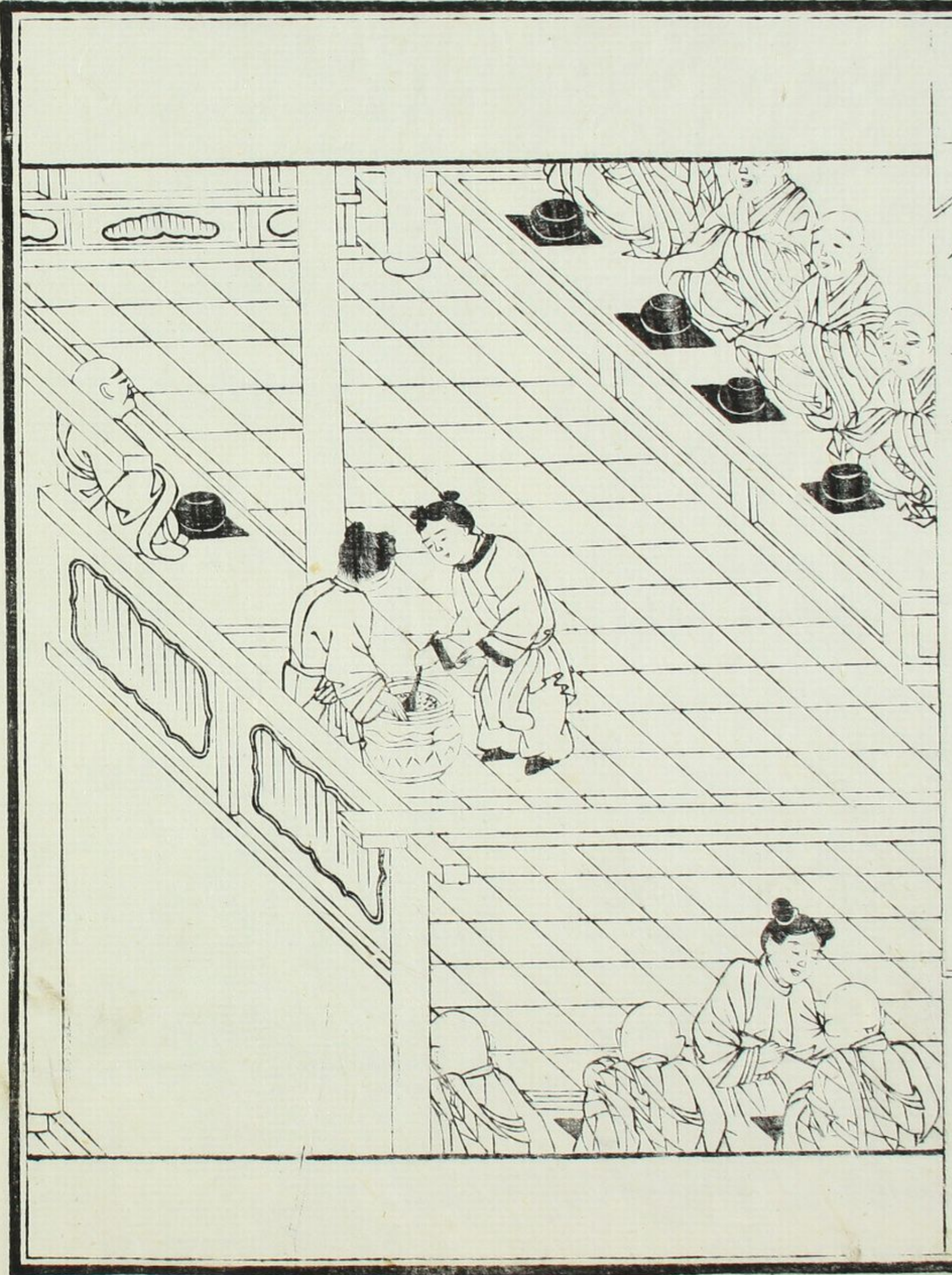


五百の齊食と  
設けて興善清  
龍雨寺の僧と  
供養の圖



行狀記卷之三

三



行狀記卷之三

三



繪ひし時梵文素月ありし光相清朗にして  
 漸にの中に入るとさするかきのごときの靈感瑞多  
 しとけむる  
 凡付法の傳來はびくくは廣智之苑はどめ  
 と全智法化と文と珍伽の冲邈とさくくも  
 といどもふくび南海とくくく遥は西天と遊び  
 くいささきうぐあは尋得文と解せさくくあふ  
 まのゆくり法智の室に入るとわく総持の  
 英とそ坊とそ精と研き給くる奥旨は保惠果  
 和尚の相兼よとままきり彼孔室の子は門徒徳

乃出四人ありは廣智教義は法光可くくび  
 と八箇かり物に令圖乃令先崇福乃惠朗等  
 六部と琢磨くく日衆の依怙よりとくくせも  
 そ稟兼と尋まど考令別の一界はあり支那の  
 幽蹟と探るくく之苑の法裔と継と是青法乃  
 和尚一人也和尚は門人又教干ありきといども  
 傳燈僅よ六負よありき中に訶陵乃辨は  
 新羅の惠日ハ胎苑の師位と文多劔南は惟  
 上象音 河北の義圓ハ令別は一界とさくくふ  
 支那と兼もくく人ハ義明供を以法大師是あり

大師洋渴のそののみ和尚お経く法成付せむ  
 とまゝ小人かゝ清く久し来と何ぞおとせ  
 今吾道亦いかむとのまゝり家後嗣法乃  
 嫡資おせりまゝ高祖大師その人おとせや  
 大師自古法道ハ派ハ泳ぎ繁ハ攀今傳  
 下ハ根とぬき源とそとりと進友の文ハ載  
 らまゝあり志ハ何れまゝ王蓮壇ハ開新極鐵  
 塔ハ入ハりまゝの密教東漸ハ流  
 教万ありといへども祖嫡お續くハ繁の法統  
 まゝハ豈容大師ハあゝまや

心せりくは渡海求法の由緒とまゝハ吾  
 本朝小来ハ時貝葉法ハのこハ  
 つま惠果震旦ハいハ了日法堂法韜ハ法  
 益ハ清ハ聖者ハ感通ハ慮計ハ  
 ども尤是南天の法水遠ハ流ハ賜谷乃祥  
 萌ハ潤ハ月氏の教風遙ハ傳ハ日域乃  
 速霧ハ吹ハ風ハ基兆ハ  
 少是ハ宋朝ハ志益法師記ハ云不空の弟  
 子惠果ト小人あり元和中ハ日本ハ沙門  
 空海中國ハ入ハ惠果ハ去ハびて法ハ學ハ

國又海りてさかりに道と流を唐の末弘雅  
 して經疏消毀より今その法 日本より流  
 こ書より吳城まで大師の史学とたしむて  
 秘宗の流石と 本朝より流 和宗より史を  
 史密教よ志とちこころひ人誰り書新字體の  
 源流と的確大師慈悲の惠沃よ浴せさうむや

弘法大師行狀記卷之三 終

弘法大師行狀記卷之四

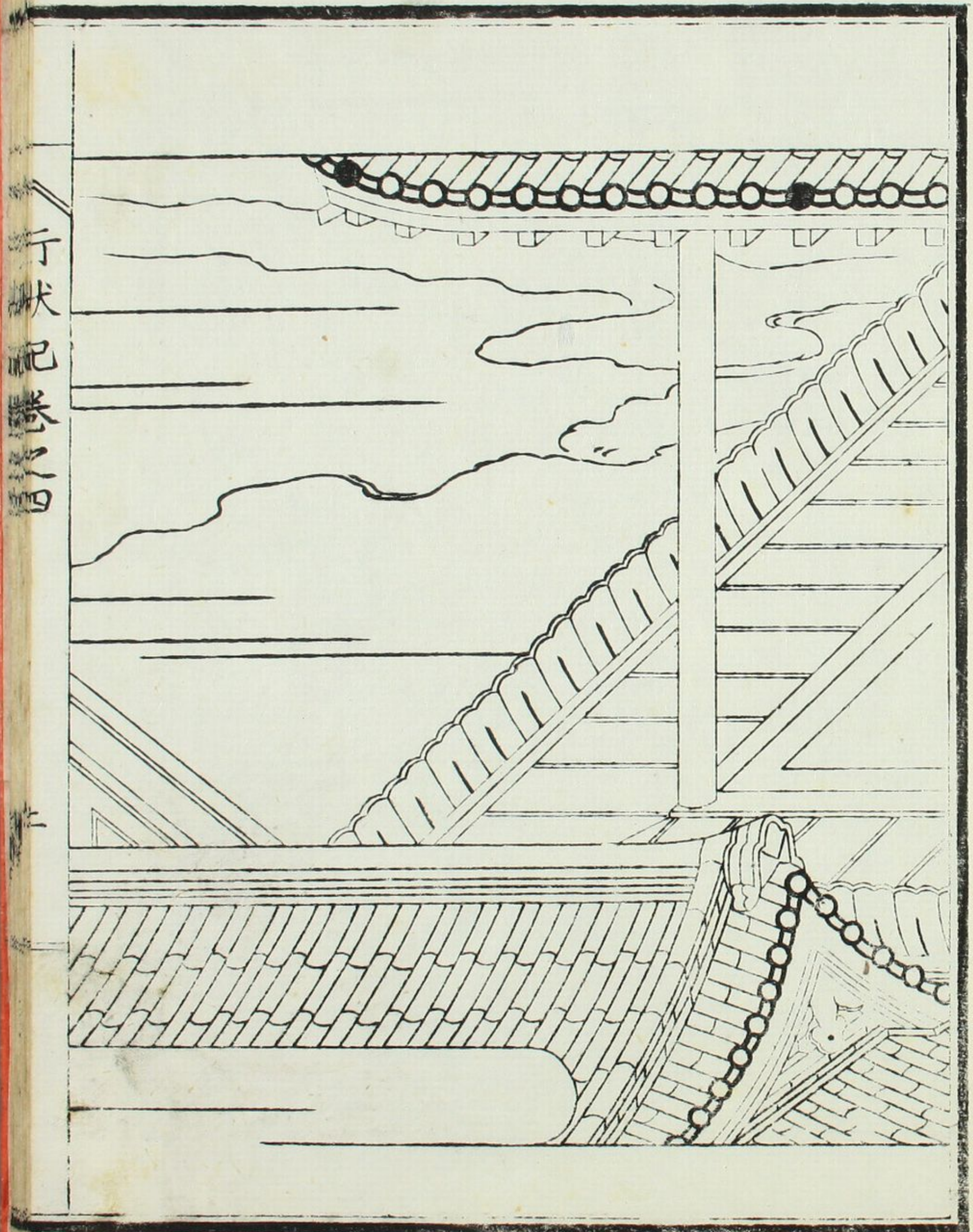
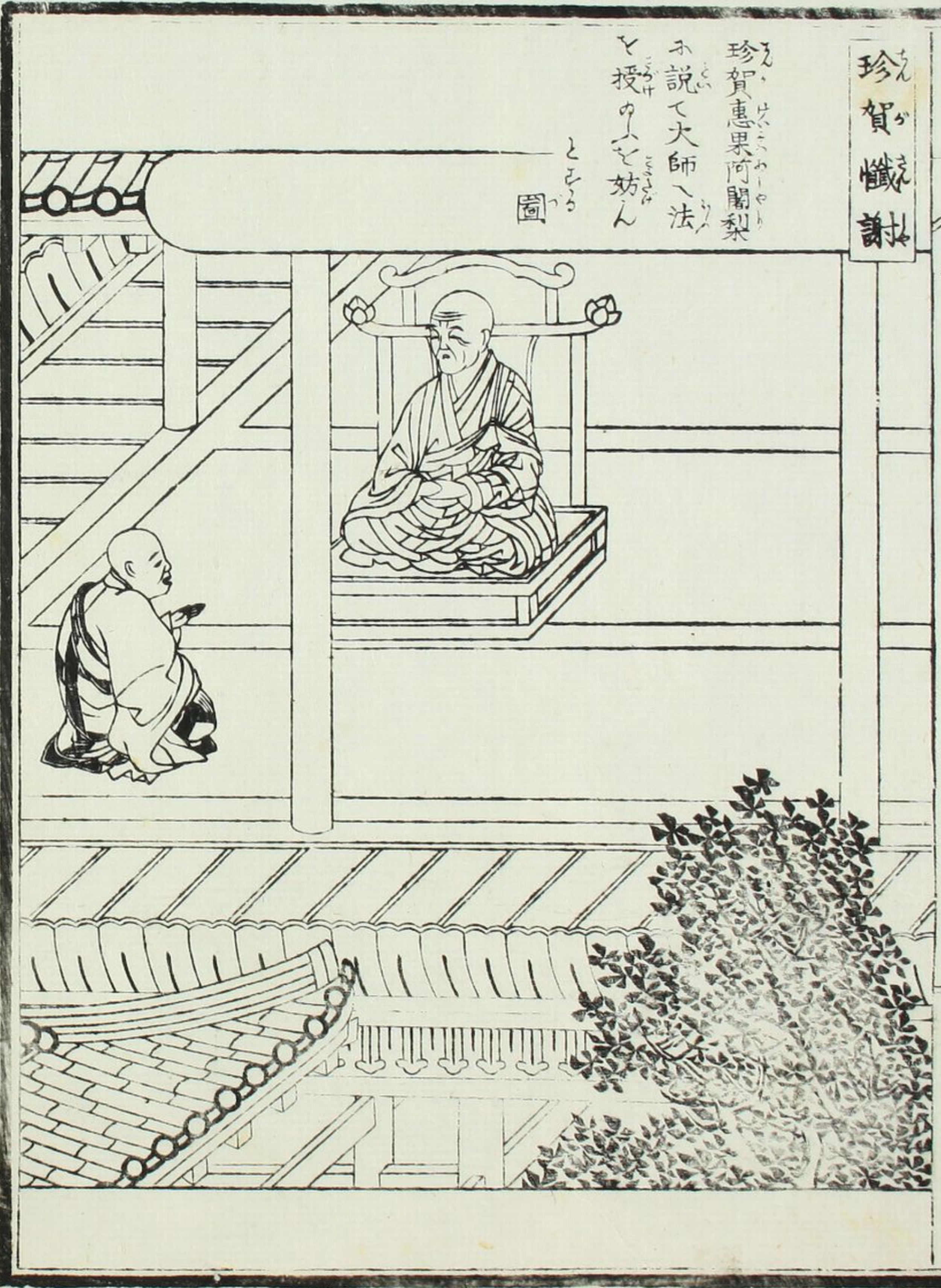
惠果和尚の法はひ中子小内佐奉十禪師順曉河  
 圖梨とちかまにを中子小玉堂寺は信孫聖と  
 ひん入り事をも人大師の史法とさす事ひや  
 ありひて和尚より松 日本に座をたしむ人  
 ありとも門徒よありは直を諸教と学としひ  
 何ぞ密教とさぐ事給らんやといさ免り事安之般  
 小及べし孫聖を和善よ神人奉てさ海く降伏し  
 給ふと事給ふありといはれ大師の法許よありて

珍賀懺謝

行狀記卷之四

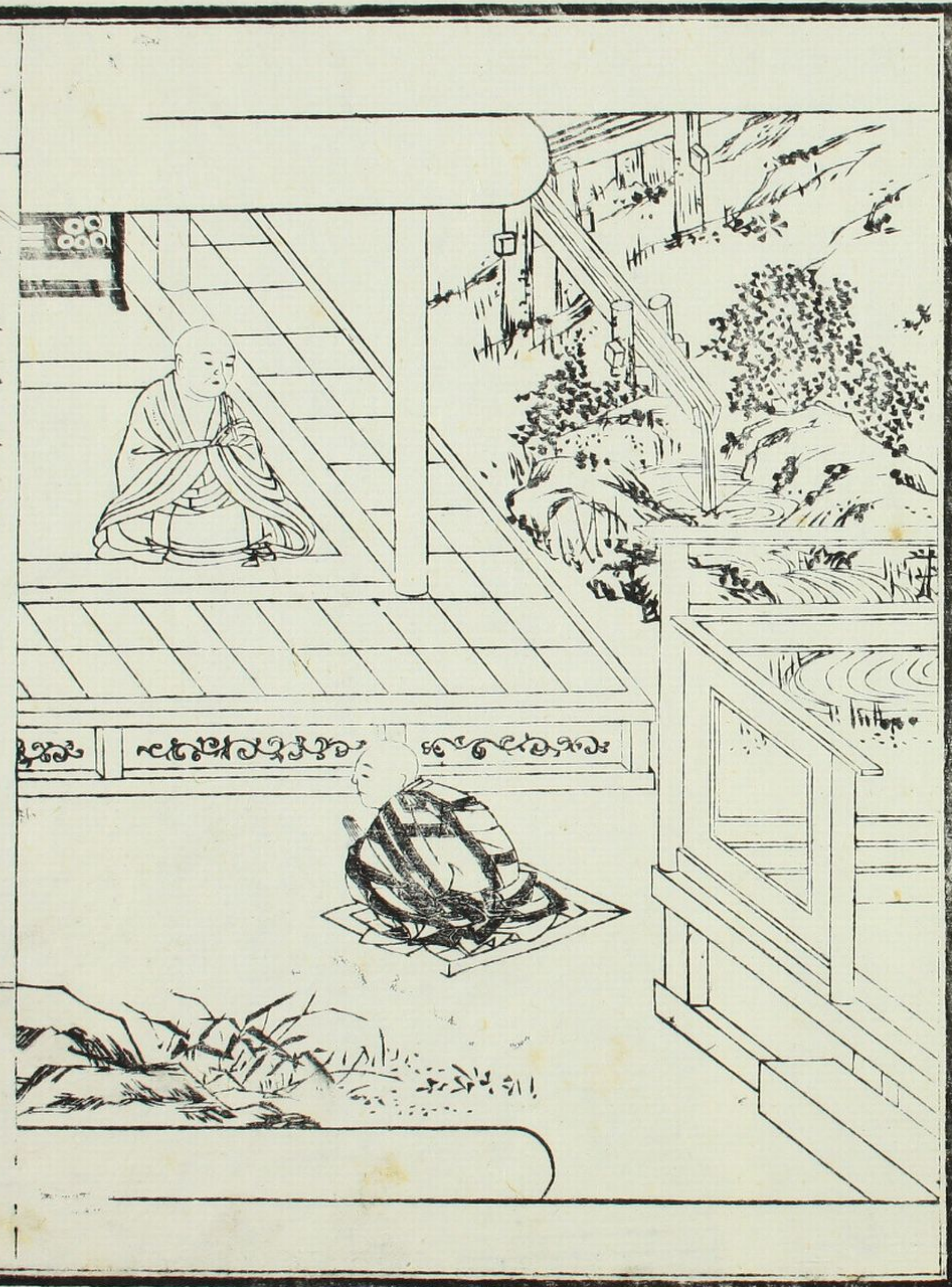
珍賀惠果阿闍梨  
不説て大師之法  
と授ゆべ妨ん

と云ふ  
圖



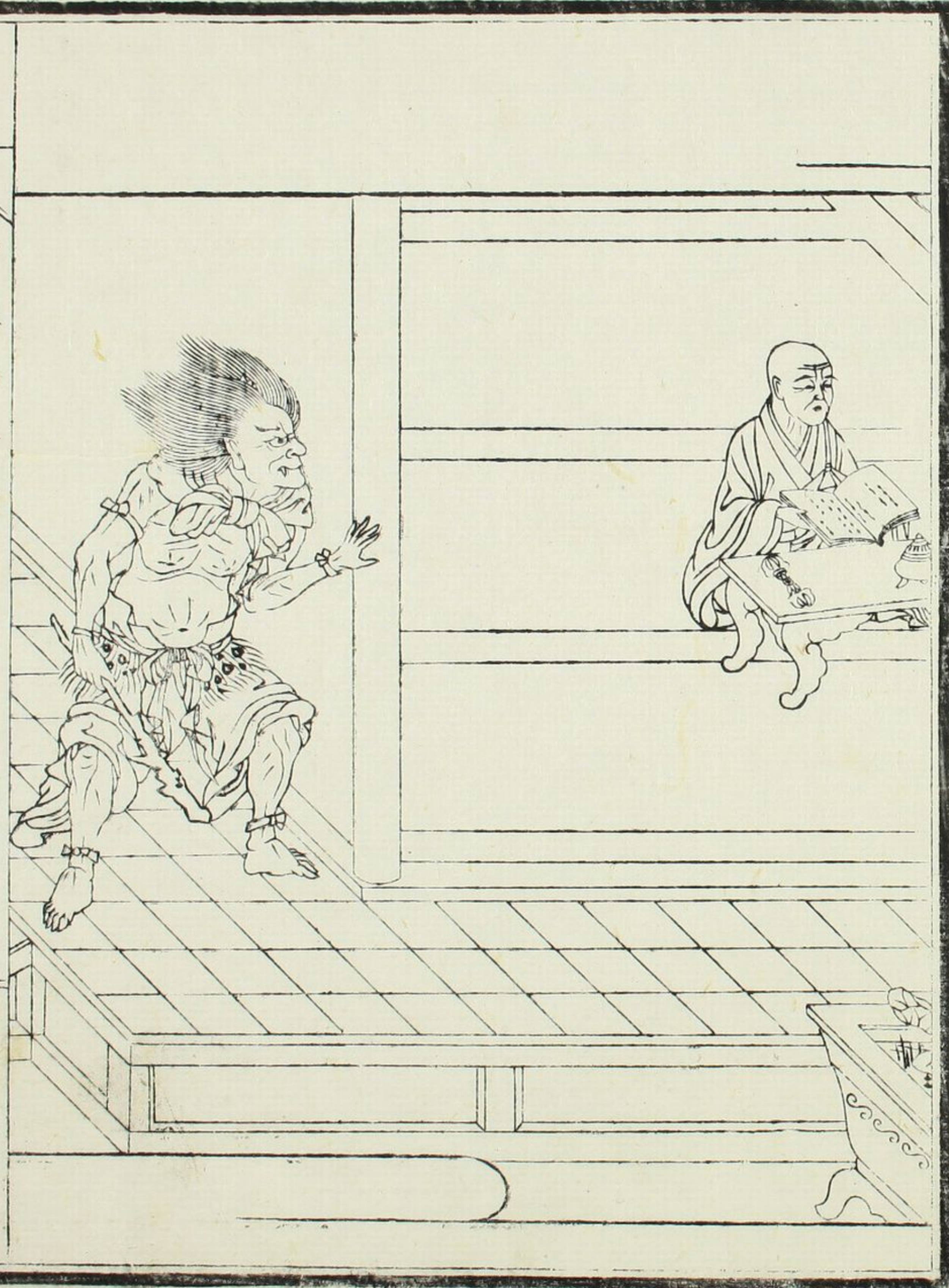
行狀記卷之四

珍賀神人よ  
呵責を受ると  
夢しく大師ふ  
懺謝の  
圖



此種と地を授け給へて申ていはく我あはれりて  
 清文法とさまごげれ志の類も今私養法中二夏の  
 とき先とううぬまにのまゝりハ永々心をひるぐへて  
 聖人小師一書と一は師くまるとが法中し給へこ  
 謝しりくふと好む  
 本師南条山階寺小修圓信都とらふ人ありて  
 抄して大師乃名とせしめとてまのまに大師法  
 海のりひご階小護法と法りはして傳法と  
 がひれり志む胎花界の大法と交給しとれ護法  
 是とてて修圓ふらるる大師志成しとて全別

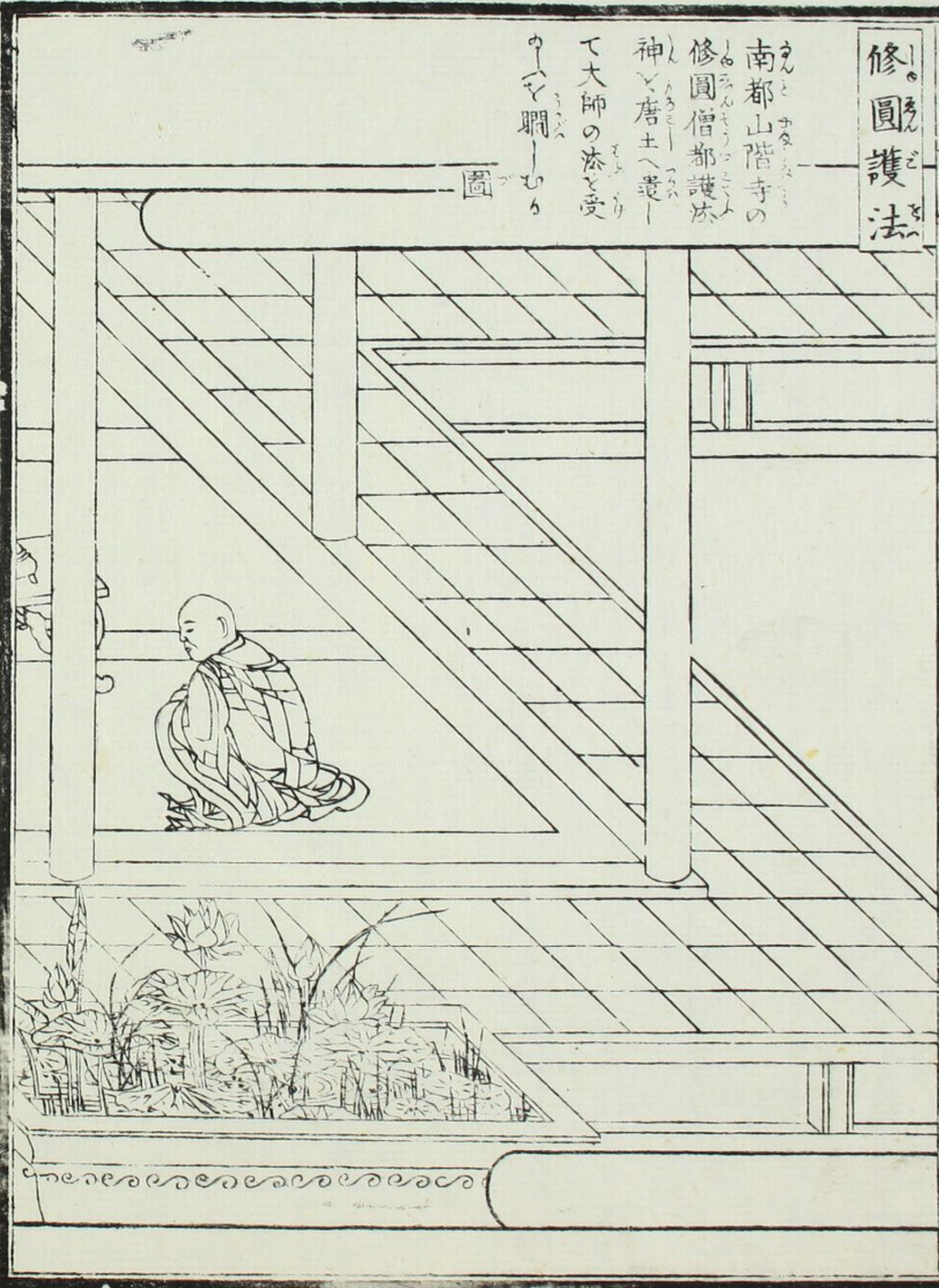
界の法とさばうり給とれと盗法の者りまきと  
 結界ありしうば火燭部とせらるて護法とぶく  
 事とさざりあり  
 惠果和尚大師小告たてまつりて云志云秘花經  
 疏小隱密を圖書とらるるまば法とふる事あり  
 此法をや丹書小命とて縮素あうりさ志むべし  
 志まふりて法を奉まふ乃十餘人と喚て胎  
 花全別界の大曼荼羅及傳法阿闍梨乃新像  
 等一十補と線畫し給へ又經生二十餘人  
 阿つ志て一百餘部の經論を紙書寫し兼て法

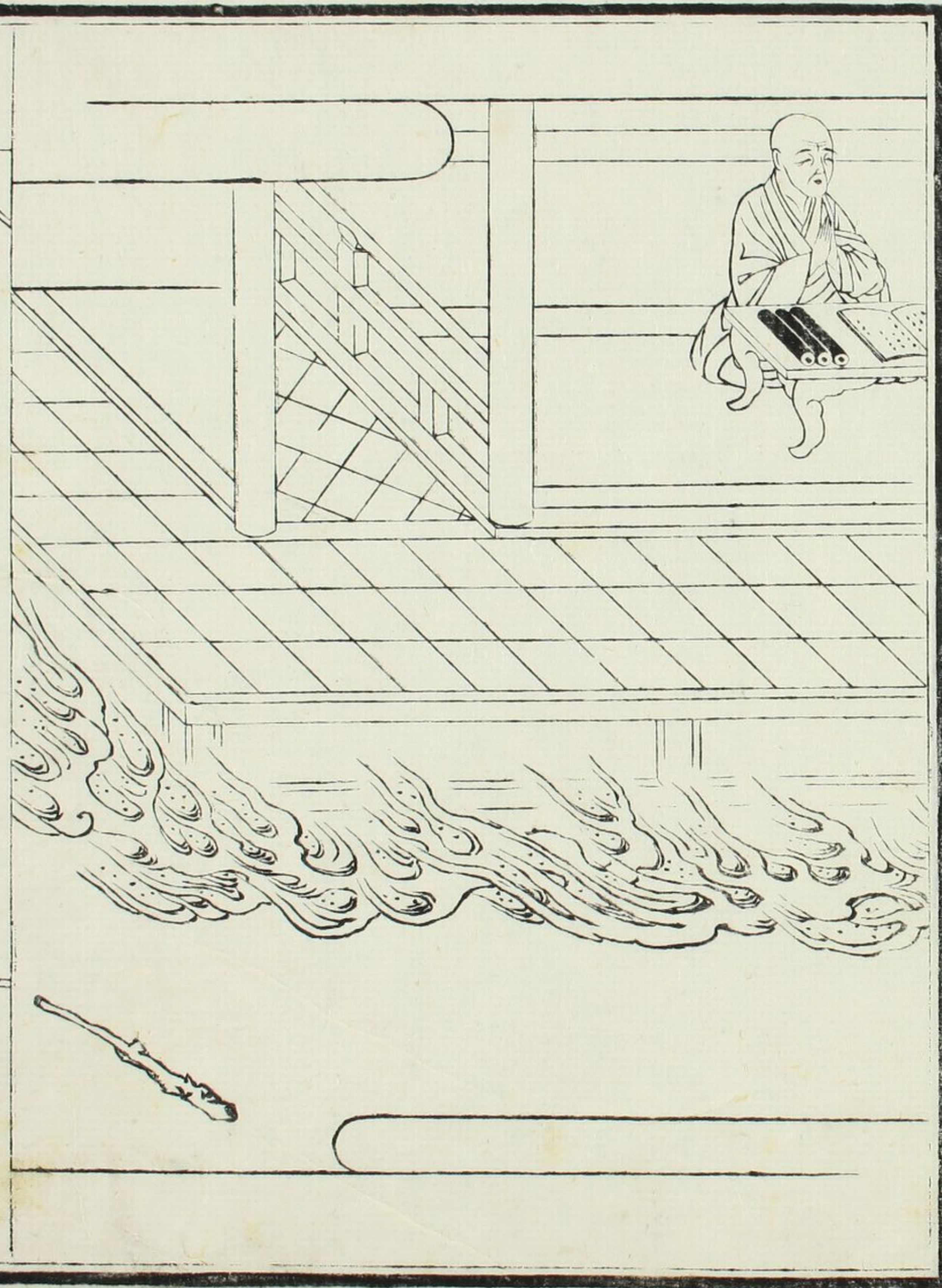


修圓護法

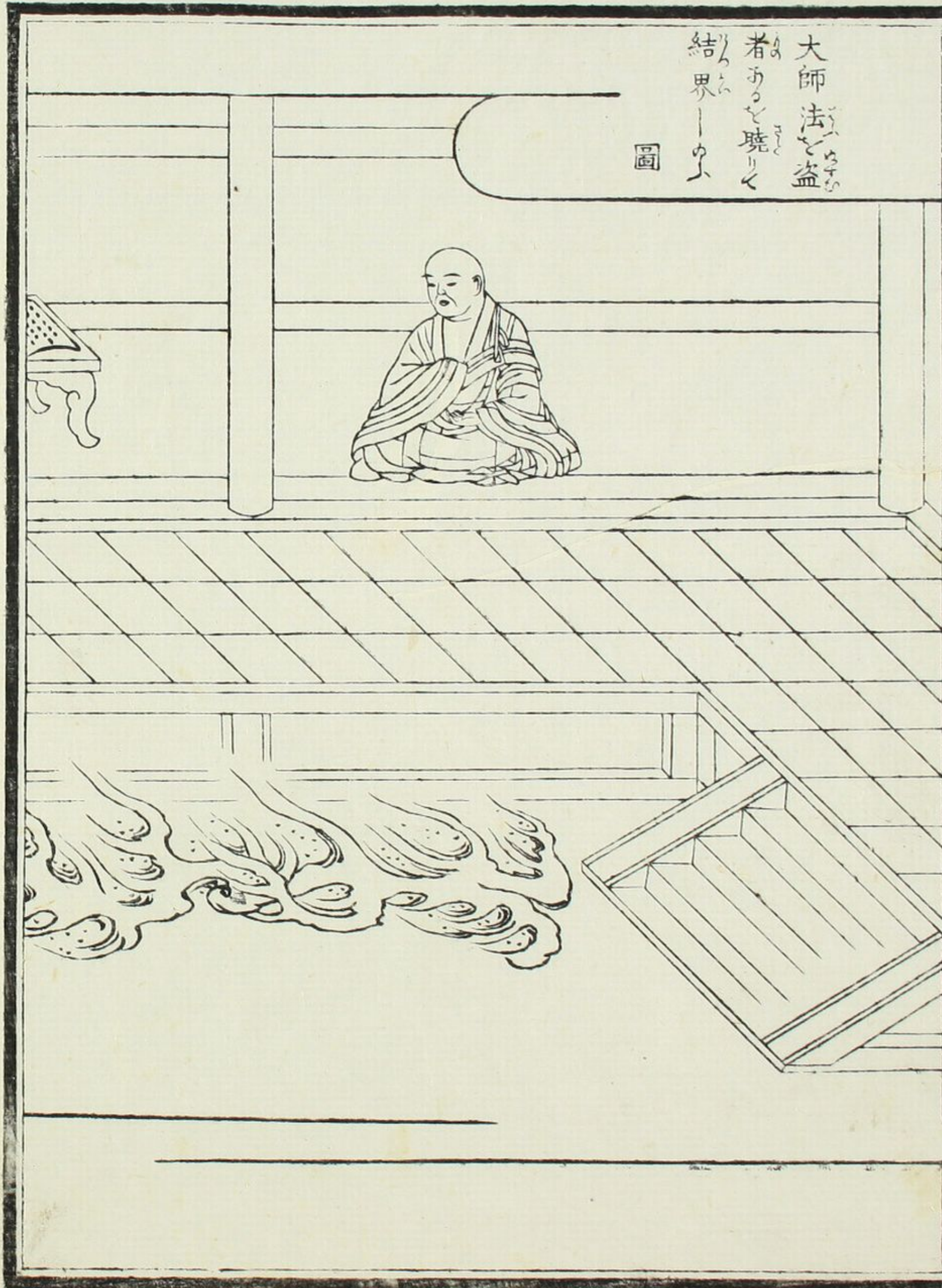
南都山階寺の  
修圓僧都護法  
神々唐土へ遣  
て大師の法を受  
けしる

圖





大師法と盜  
者ありを曉り  
結界一ノ  
圖



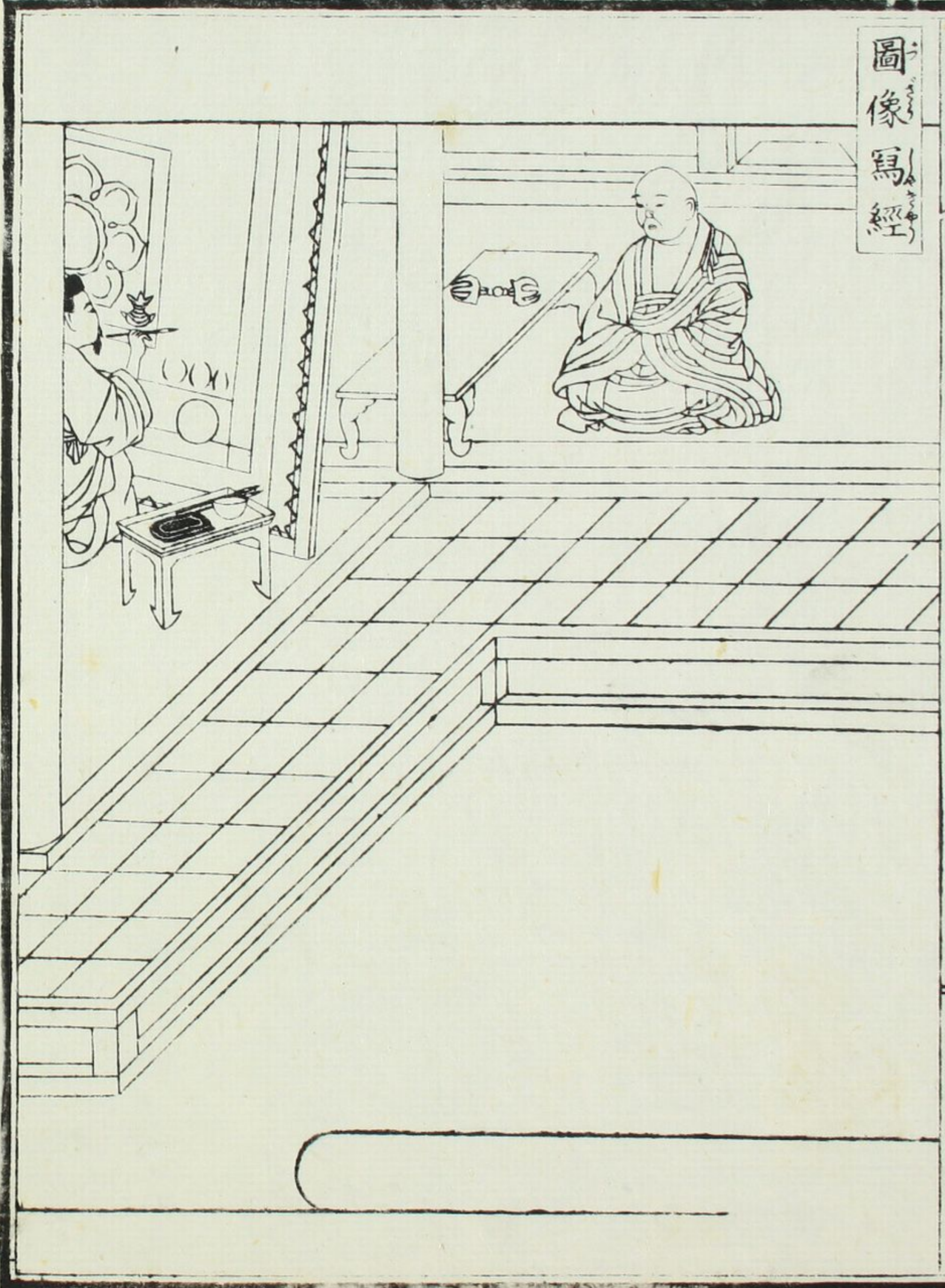


護法本邦  
道飯圖



奉法の博士揚忠位起吳等法石て 鈴杵輪楸の乃  
 具一十ふ事と新造一給入を疎治する不との  
 法ふりて種々の寶物と合威を新くびよみな  
 如來乃智乍法つの表像なり文持頂戴する不福  
 利極りか一外六魔軍と退帝内六煩惱とを付徹  
 小是玉と法る具物人と利する宝蓋をかよとや  
 惠果和尚入滅の終ちうづれ給ひりれ 本為乃具  
 等悉く大脚小付属一奉らと給よと中ふ佛  
 舍利八十粒 舍利一樹 白螺乃大曼荼羅人寶乃  
 三昧耶舍利等 び小捷陀穀子の袈裟あは珠子

圖像寫經



行狀言卷之四

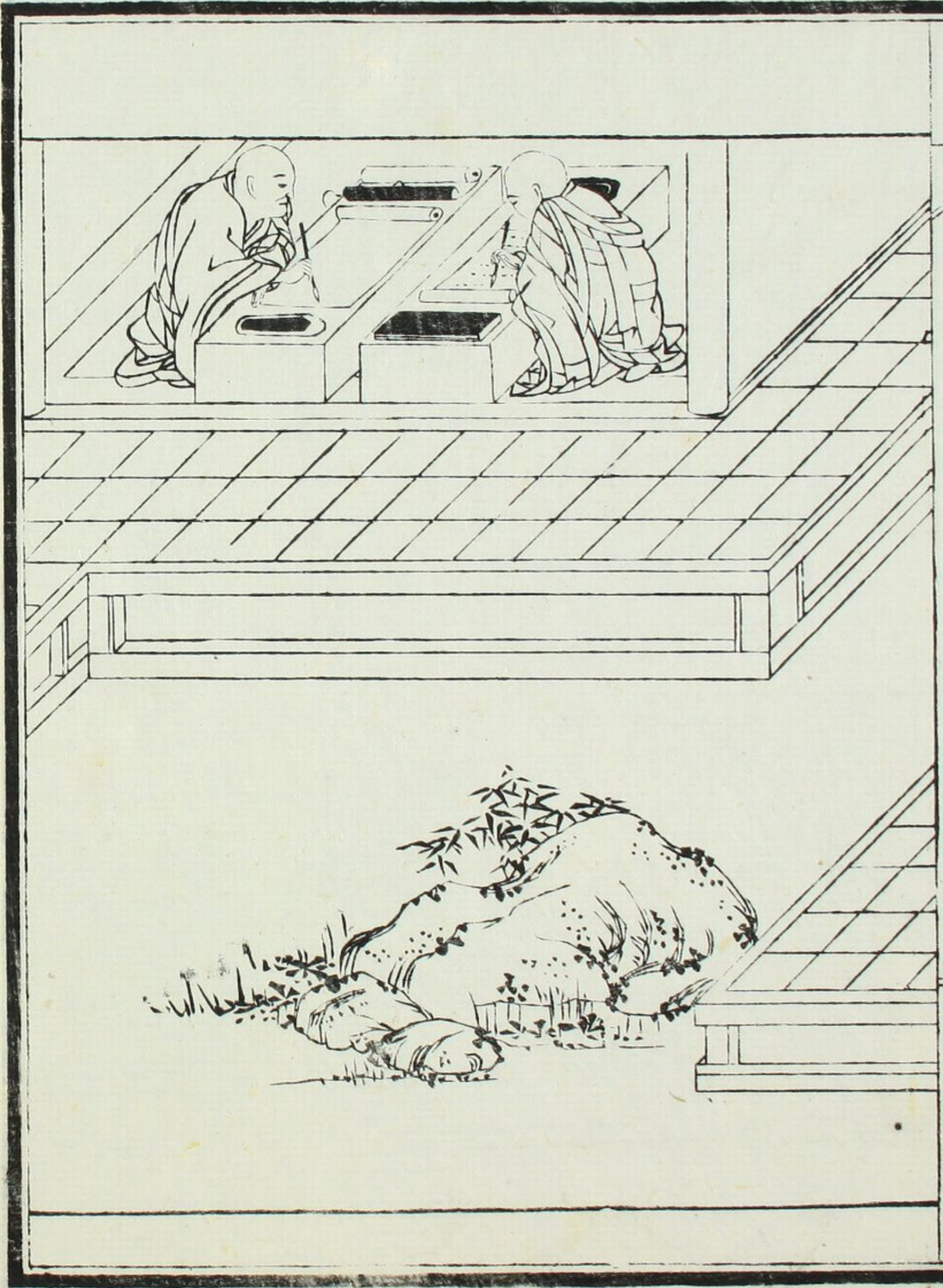
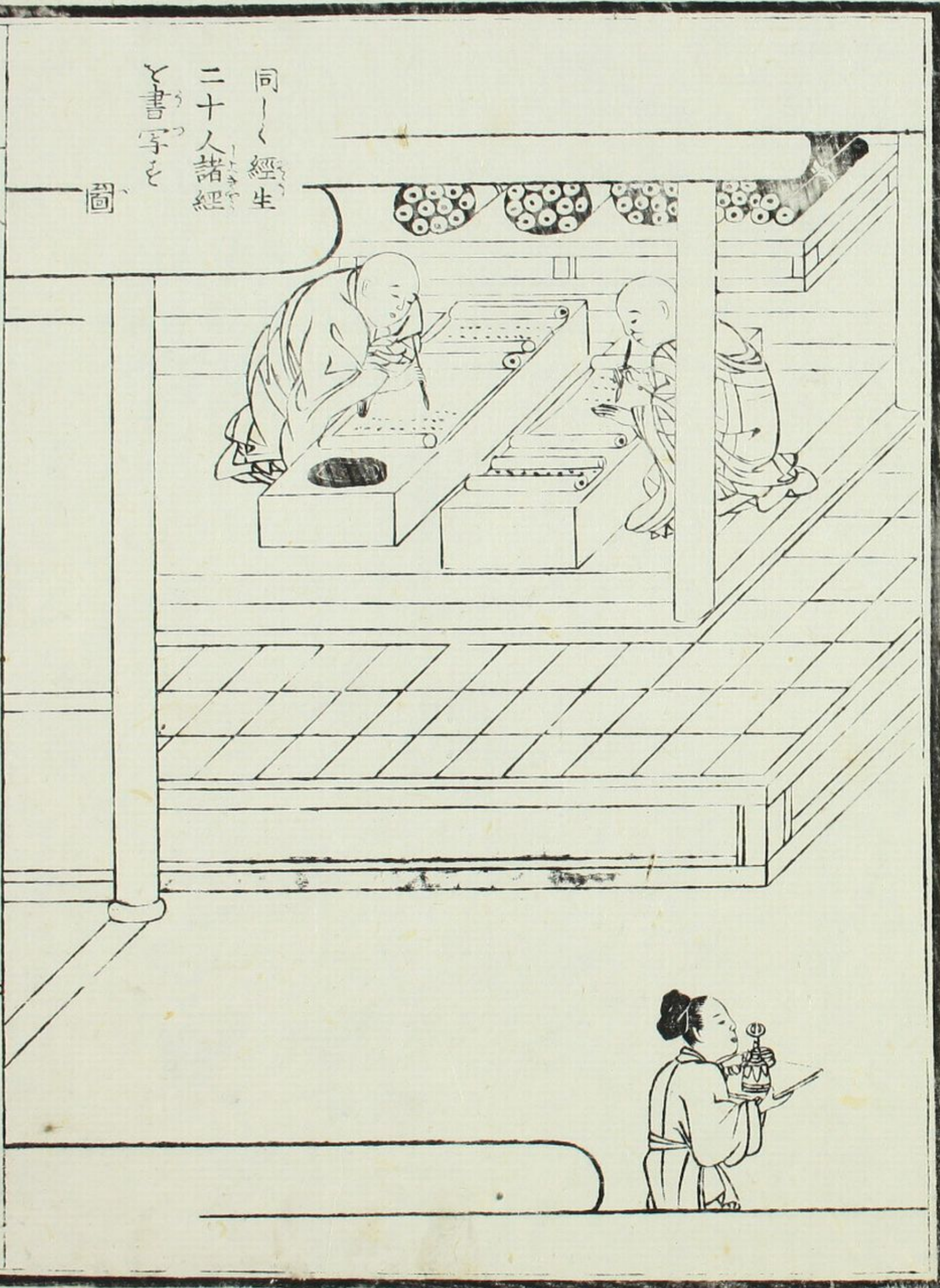
大師画マ  
集て曼茶  
羅及び影  
像等と紙  
画し之入  
圖



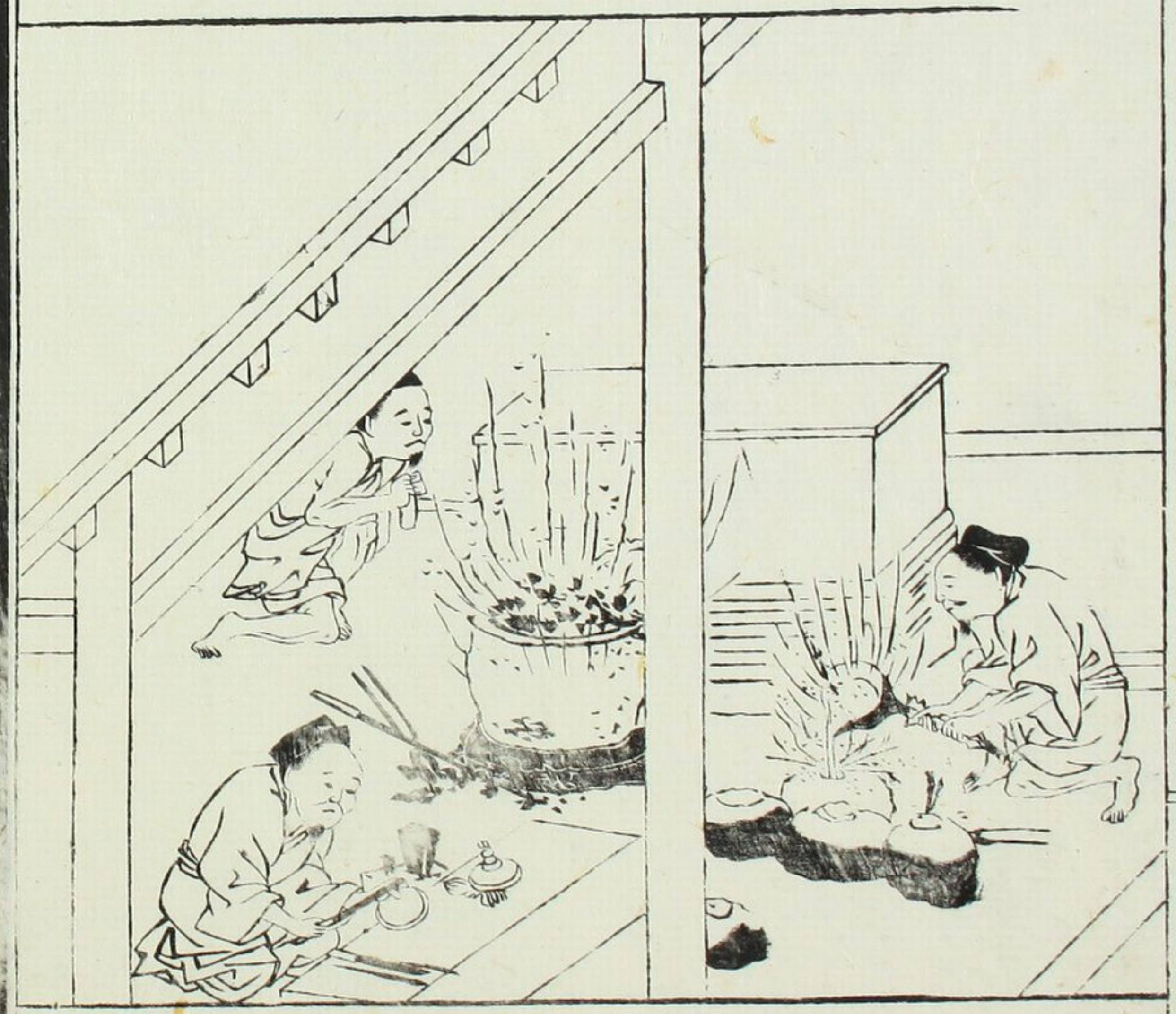
行狀言卷之四

同く經生  
二十人諸經  
と書字と

圖



鑄工等  
佛具と  
造る圖



祖師相傳のうらみて敢てかたきくは是則傳法の  
 中伝若生の依怙ありあう河多成和尚唐去あえ  
 箇室と給とて大師小授ふ一給つる河多成とを  
 やむとふれ事なり則若のたまはく我賢胤乃  
 時は一若く廣智之苑ふみくをまつる一之苑  
 をあまうちおしりまみ極る事子のぶとをす内ふ  
 まりり寺小改とまふ小形乃とをてまふ河多成  
 らは竊小告給はま汝密苑の善ふ河りと是ふ  
 ろをて友那の大法秘密の中契とてまふ河多成  
 えとり自余の弟子若と道若ハ俗或と一那の

大法とくや或と一尊秘契と得て法ぬさり  
 かひありぬ事か一岳瀆の恩と報しなむと  
 びふ小異天毛極なり一今け土化縁盡るむと  
 毛久くとまするべうは友那の大曼荼羅一百余  
 部の金剛乘教及之花持付の物并小供養の具  
 等本今ふ海内小流精とて我汝が素くむ  
 事減るみて今のまゝんこは誠恐むは今  
 十好はあ法のの河まと一河をさづけ経像功  
 朽ちるぬふく郷玉よ返て玉家少くても法り  
 天下小流布して養生の福とませ志り河まは海

屋すく美人もの一も是則佛恩と報し師の  
 徳と謝まふるべ一玉の為小忠ありあふ於て  
 孝ありゆ忠くゆまはる事かう徳と証むお  
 海小教誠し給き  
 後之東院東宮ふおはし一ま一時小聖の信都成  
 旨令旨以う事くまはりてま云の要事とある一  
 一さま一時密教伝信るあく不同なりといへ  
 ども東寺の大宗大師の法流ふ付て諸家り信  
 ころ事十種ありいもゆる灌頂殊勝支学殊勝  
 梵文殊勝相兼殊勝誓願殊勝寶珠殊勝道具殊

惠果附法

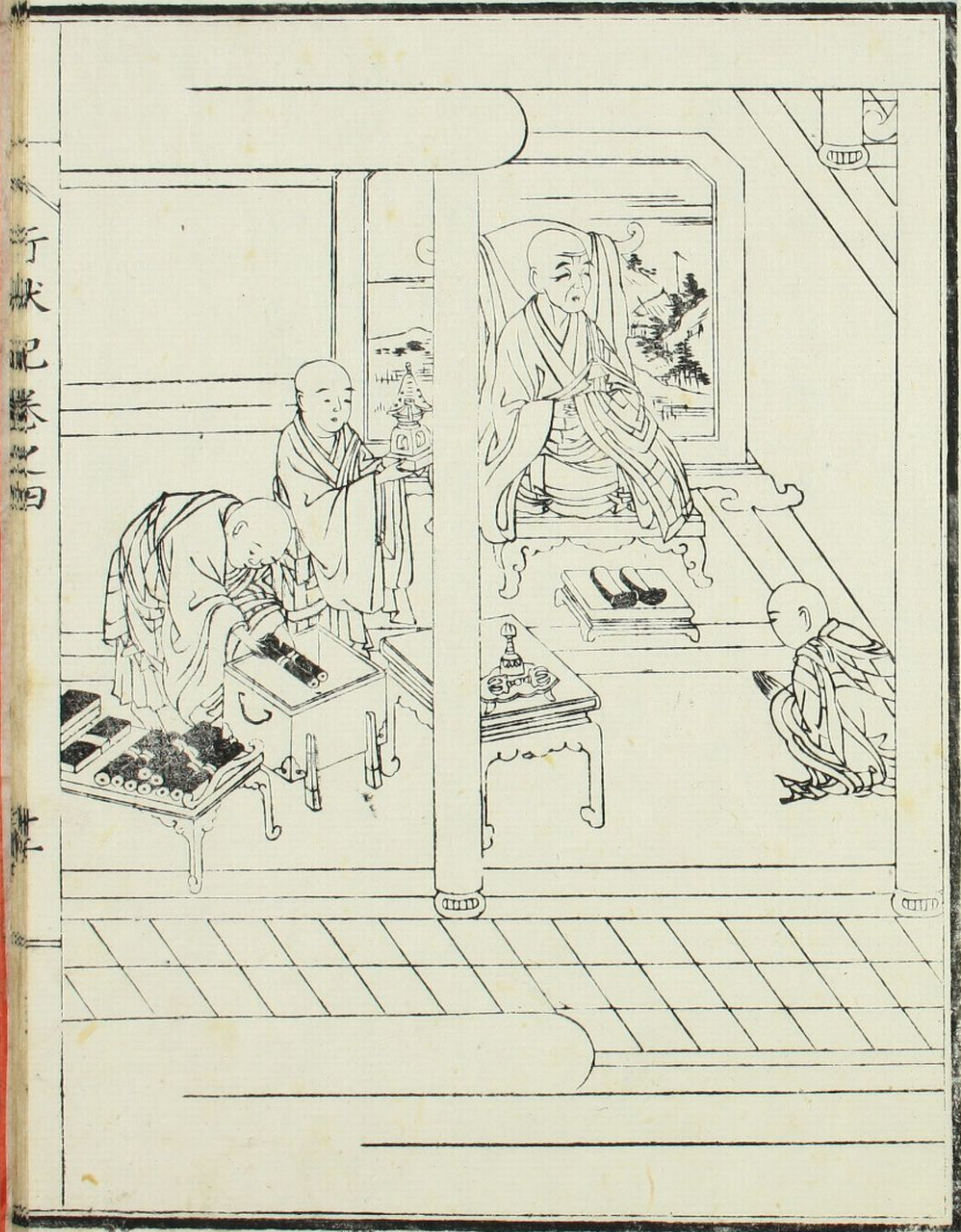
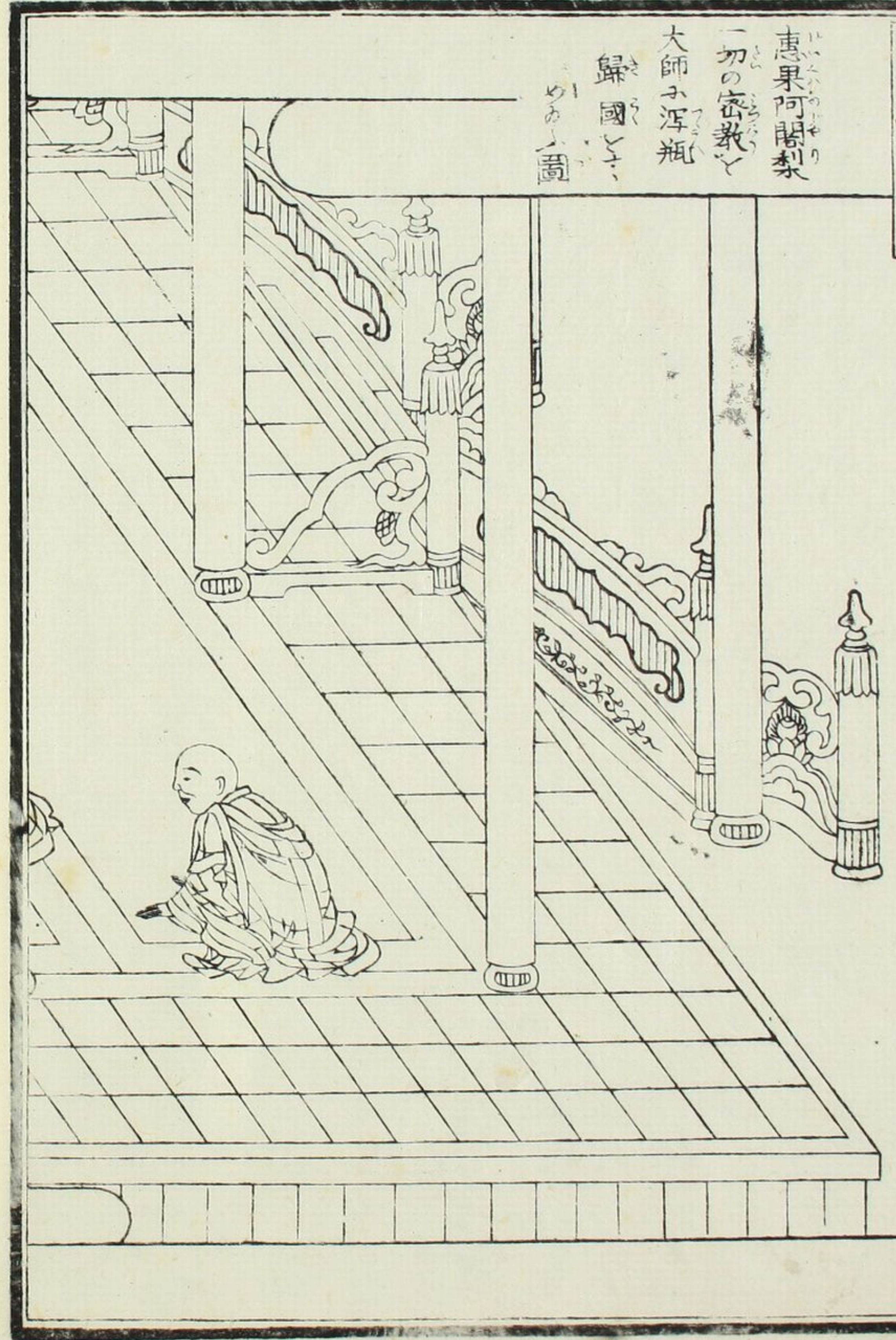
惠果阿闍梨

一切の密教

大師の法瓶

歸國

の圖

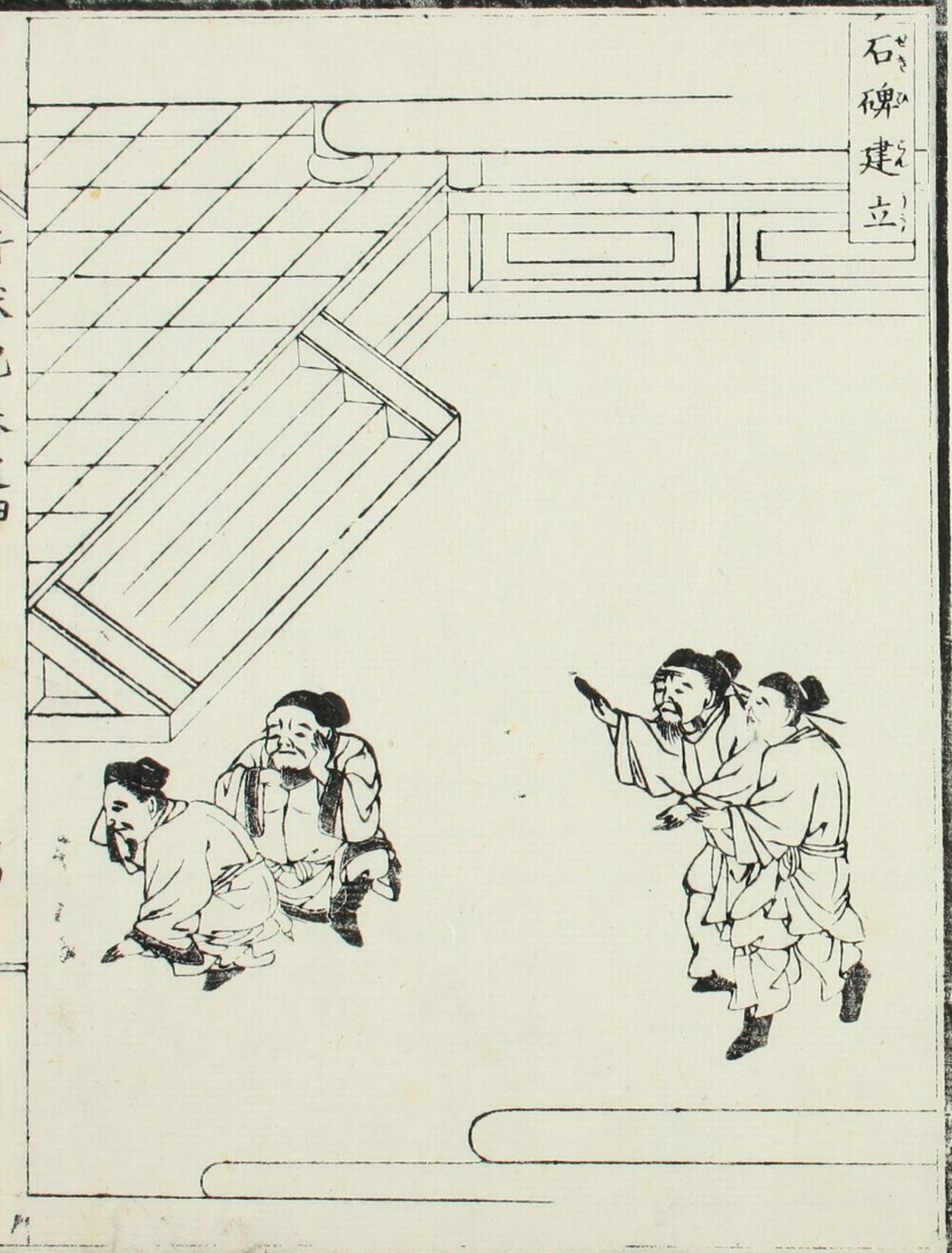


務入定殊勝法則殊務外獲殊務ありきなり  
 小道具殊務の意以述て如來付橋の袈裟ハ永く  
 天竺の鷄足山より波羅達摩法伝の袈裟ハ今  
 震旦此曹溪寺より唯志云一家の平伝及具  
 のみ源月氏より出て大唐よりこれ 日本に傳へ  
 今ふ東寺よりなり其云の處を知らぬ者此と  
 ぬるまじり誠ふおのひみまが大師書法乃嗣付  
 成得給一鳥卵と利濟とんりとちうん是  
 たりて西天累祖の具物と法とくきこましく東寺  
 法護の道場ふと先師給ふ法縁はふよ厚なり

とりてありぬべし志うゆゆバ杖乘小生臥うあむ  
 人誰う匪衣の折りひと凝るらんや  
 惠果和尚入滅の時門人よ告ての給はく支那の大  
 法も如來の秘藏成佛の徑路なり誓を法界ふ  
 流傳して有情法度晚とむと成経ふ今  
 日本のおつ空海よりて支那の壇儀平契云云  
 漢梵たがはむ蘊奥とる事と經事統とる法をら  
 ぶと一是凡徒ふゆぐ之地の聖者なり内り大  
 乘薩埵の心法具一外ふ小玉沙門の相と示り  
 日出ま月うま油燈ぬまはより火き物物

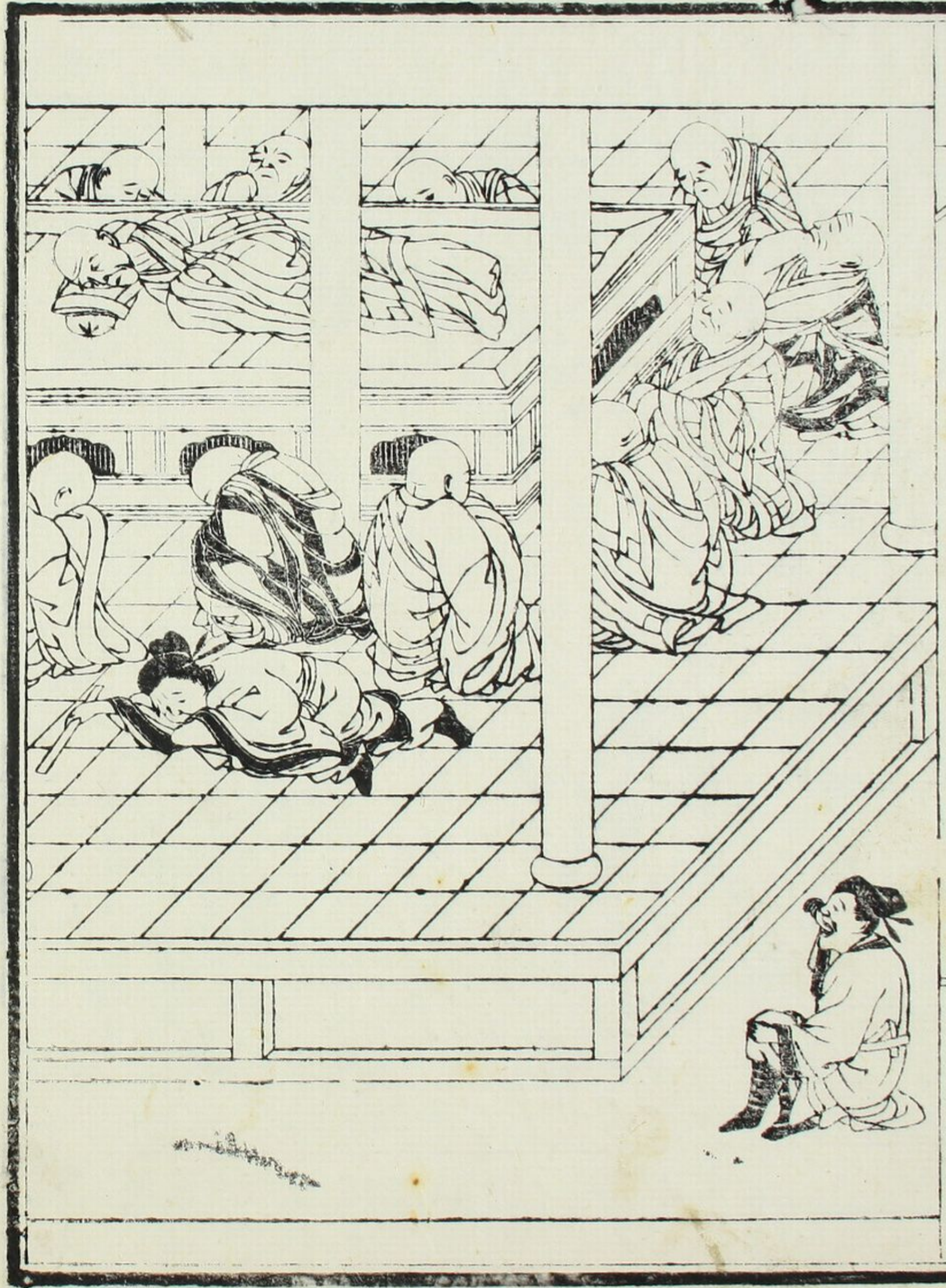
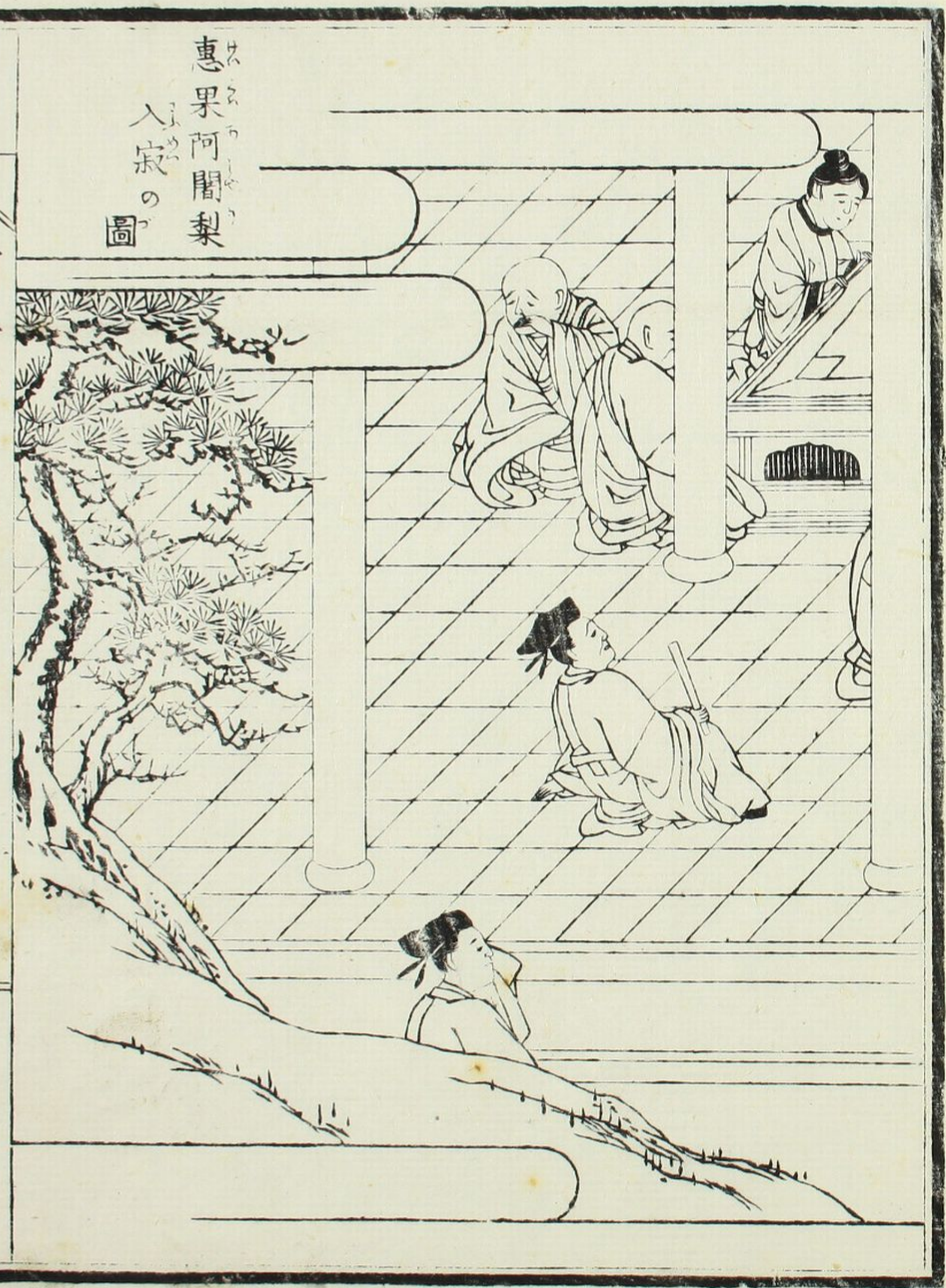
法承の理より菩薩をいふはらむも如來も滅し給  
 りまはらむとまはらむんり法承のいとすけりも唐  
 の承貞元年十二月五日新と蘭湯おすけりも唐  
 乍とむすび告るふ微疾と以て示し終命をりてそ  
 昔新の化とや若志赤梅檀の春乃相室しく  
 りと今和尙の寂ふ入る青龍寺の新の月指を  
 のある被とみ十二類魚の涙とわがて依授乃  
 まとくくあへ事とわがれ是ハ一人為民軒授と割  
 て護持のちうくまぬるは成かるし聖年  
 正月十六日城東新系不毒しとてまはらむる  
 元和

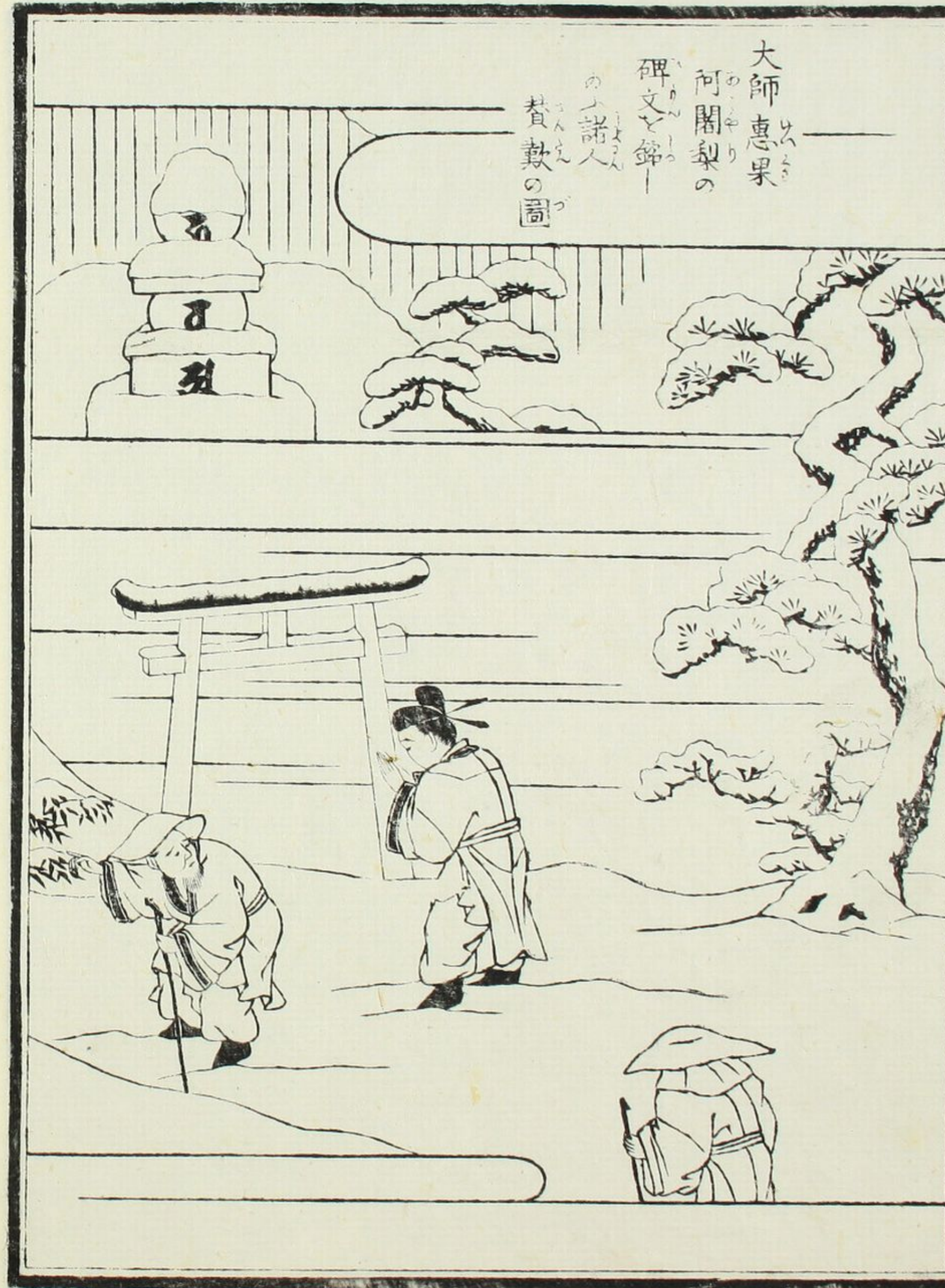
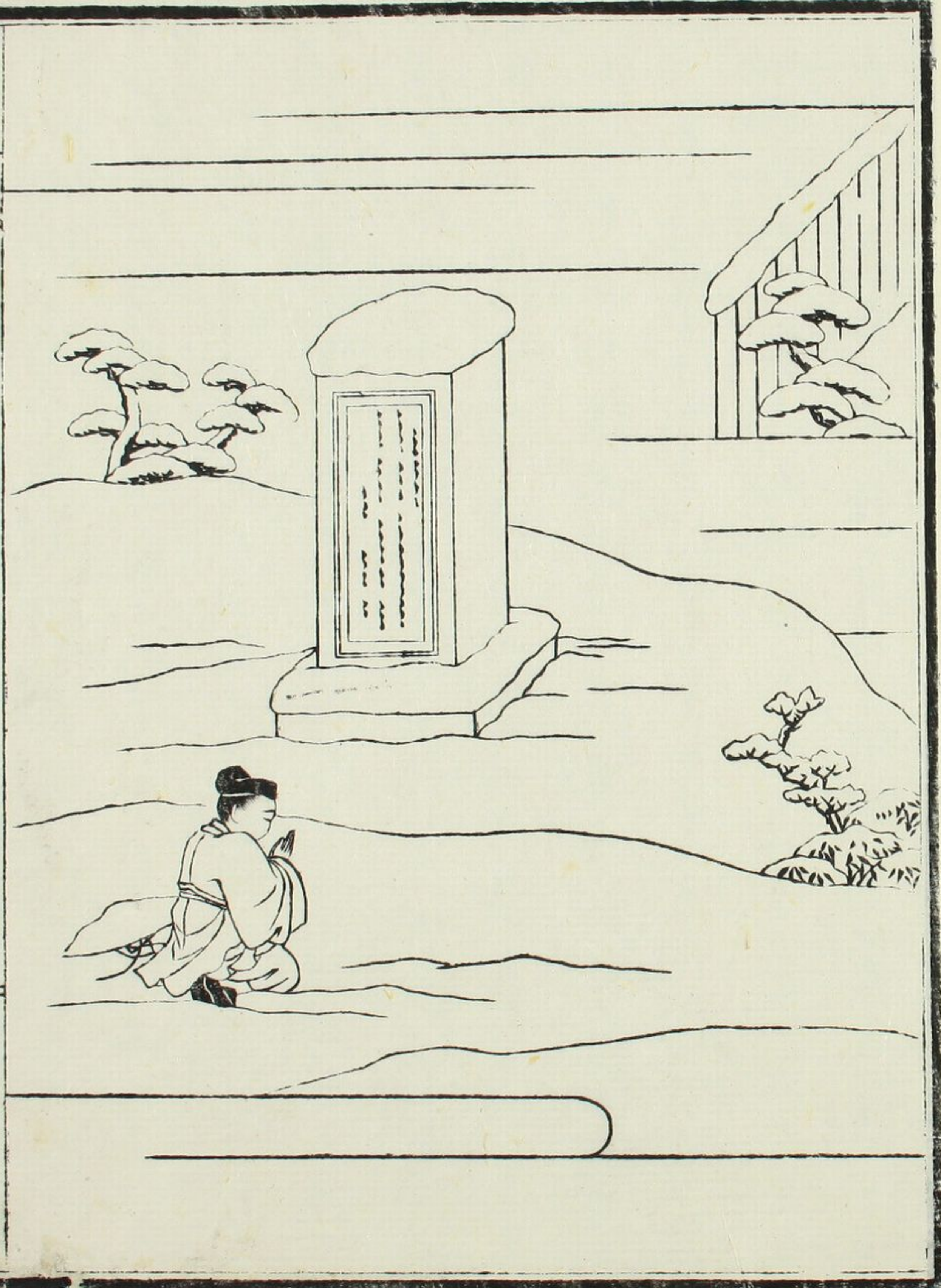
石碑建立





惠果阿闍梨  
入寂の圖





大師 惠果  
 阿闍梨の  
 碑文と銘  
 の諸人  
 賛歎の圖

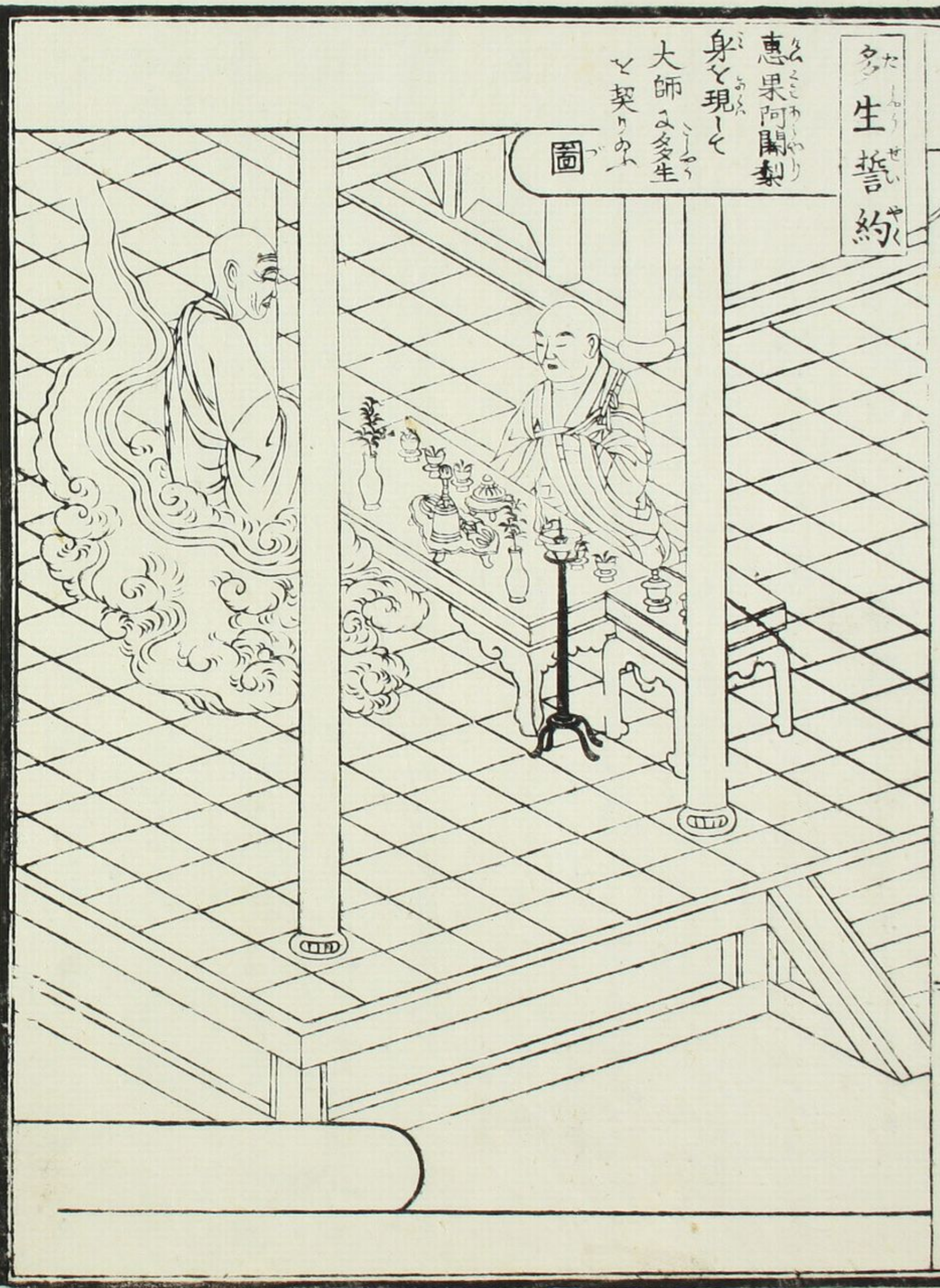
の合會地のみちて美人の悲感天賦動せり  
 大師あまの戀慕のゆゑたゞぞして石碑の文紙  
 うれ十二韻の縁とあまのれく和尚の徳行と何  
 一廟塔の下に立る縁給ひあまの和尚と大師と  
 多生中ふ誓約してあまの縁密教派印紙  
 給へる縁のきりなき権者の師資とあまのせま  
 めと見歩の縮素何やみ貴まぶといふとあ  
 まの縁に頼縁をたれ一むるべ  
 和尚入滅の和大師追戀の心と一悲歎の思  
 まるぞ乃場ふ入給ひは紅涙と云衣乃袂

はみ丹誠と寸心の磨ふるして持念一給ふり  
 和尚まはり宛然とて希まきてのたまはく  
 あまの縁と汝と若契のふりたる多生の中ふ  
 おまふちうひく密教と云流を世にまよ師資と  
 めふとたが一あまのあまの縁と汝と  
 若て遠くを來て我法をわくはくはくはく  
 に終るぬを願すを是より汝を西土あま  
 我是といふを我とあまの縁と  
 ひさし多尚る事ふる我をたふりてさるる  
 の給ひた大師あまの温熱と云をまつりなむ

多生誓約

惠果阿闍梨  
身と現く  
大師又多生  
と契りゆ

圖



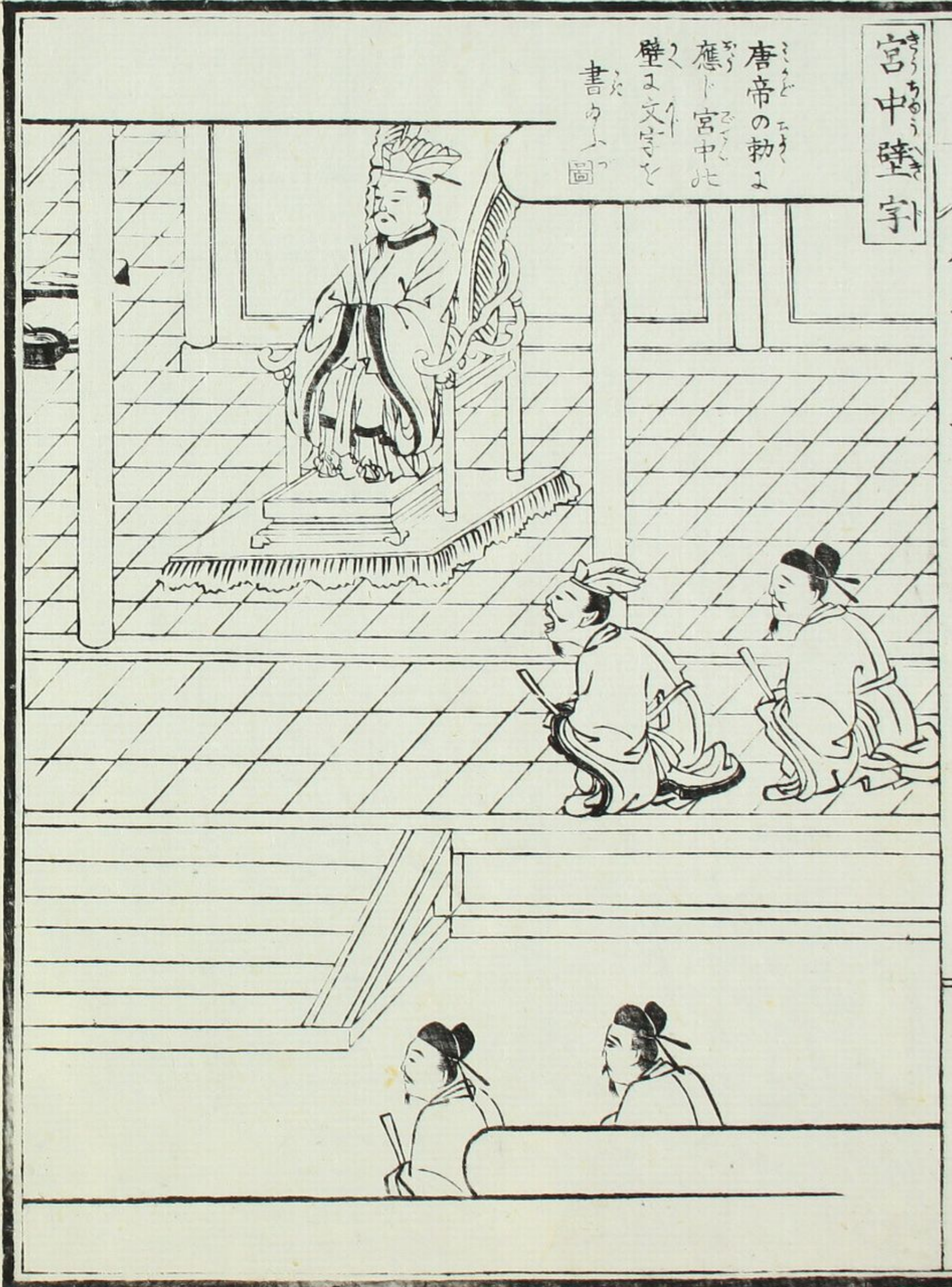
芳淡とう糸給て爰くつとも口にくく悲愍の清  
 涙袖よのまらるる生々師賢乃のさうぬをう海  
 志びて書抄りて給へる碑文も亦非我力歸非  
 我志振我以約引我以索流船之船教示異相及帆  
 夕屢說宿緣進退非我能玄留隨我師孔宣雖  
 泥怪異之說而妙幢說全教之爰所以舉一隅示同  
 門者也と載らるるをりて記り於菩薩大士の方  
 便のづき毛形をのりてはして三界六趣の留不接ひ  
 法正法と云海も衆生を度し給ふ希有の事  
 みや法りておのひみまに番象ハ番象と友と

輪王ハ輪王ト父ト母ト云資ト云皆成覺乃如來  
 得道の薩摩乃り昔迦葉佛の時少くも其菩薩の  
 了れ兄とば日珠と云資とバ月鏡と云了れたがひり  
 願とたあ一契とむすびて世と不知識と成て生  
 小正法といはれ其世とちり彼の日珠月鏡ハ釋  
 迦滅度のちる時龍樹と云はけは外道の邪林  
 と摧て如來の法輪と轉り彼とりちて是と云  
 新羅新智馬天小沙化一金智廣智中お小東  
 遊一惠果弘法東隅の傳燈と云う人三子り師  
 資とてそがひよ主伴と成給事皆是者願の

いふと云はれ誓約の志と云一むねいふ人多く蛇  
 小沙と云はれハ蛇の河ハ成と云は古法の跡跡成  
 下愚のちる下よ河と云とや  
 大唐の宮中ハ三間の壁乃り番右將軍王義之  
 筆跡と云ふ免より事年久かりて破壊一と云  
 事二間成修理と云はれ昔は人なり  
 ける成唐帝 日本ハ和尙小書志あり給ふべきは  
 勅乃り事れば大師左右の多是小筆と云り清は  
 筆と云ふ今ハ小筆ハ又成法同時ふとせ給ふ今一  
 少々墨とすも入壁乃西ふと云はれ成事とせ

宮中壁字

唐帝の勅  
應ト宮中此  
壁又文字を  
書ゆ



行状記卷之四

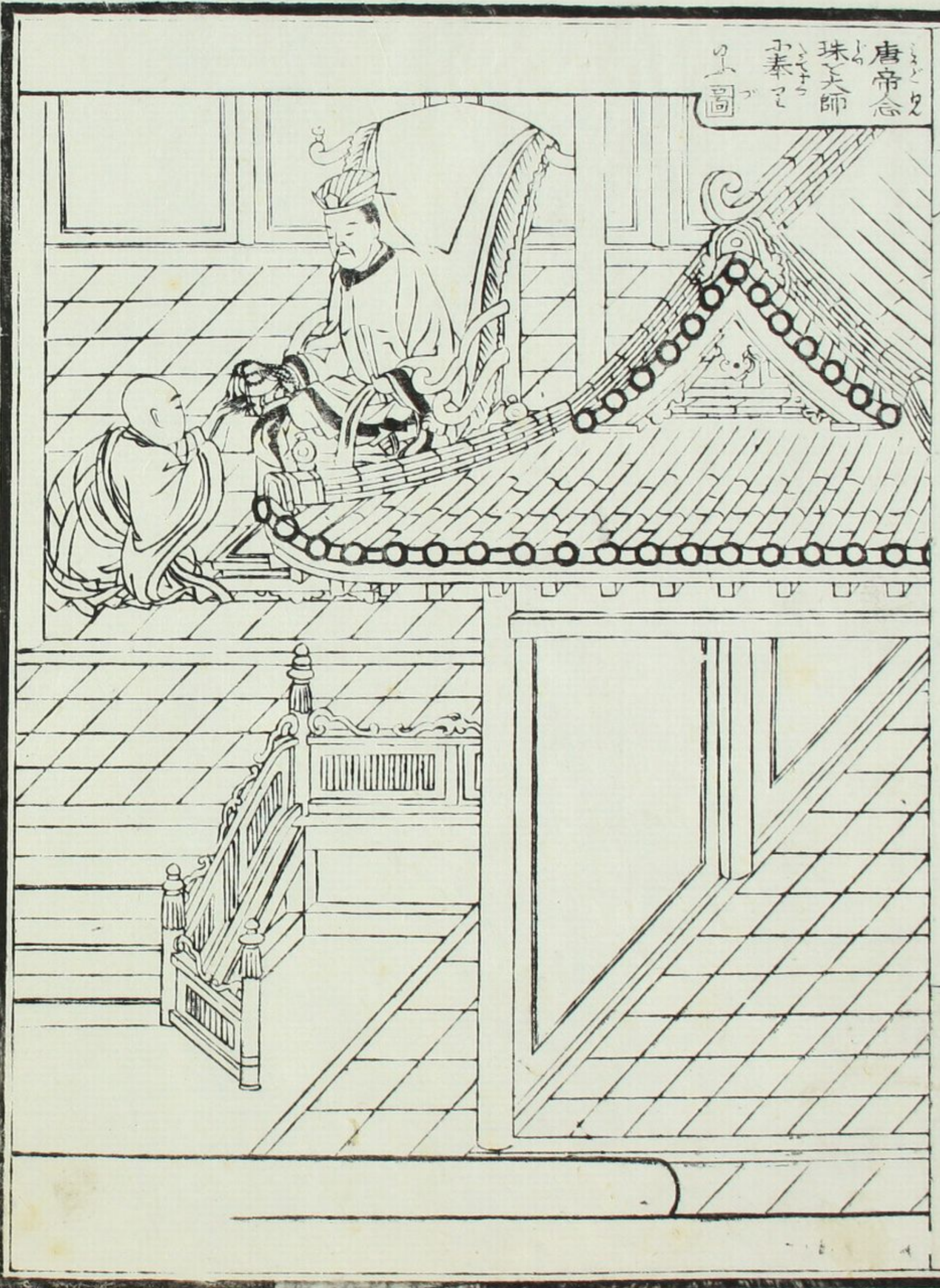
其



行状記卷之四

其

唐帝念珠大師  
奉  
圖



給字自然小樹とのぬ字ふかりて間ふみたり至上  
 毛匠下もあまを召さる人警歎きげといふ事也帝  
 歡感の河より勅を下して六等和尚とて法華を  
 臨沈の功と河よりほし入木の源とてあふ人唐の  
 えれやとていども大師ひとり垂露の點とてあ  
 給小車 我師の徳と河よりさす少あはげやされ  
 ば其濟信正大師の尊源と河先給小詞小歌雜奔  
 獸の畫福九品ふとてまは涌雲廻水の悲誓よ八  
 統と變どと付もとてさあふりのけとや  
 又帝のさうはく和尚はまは留まらぬ人師とてのそ

してまわつて母と大師とて母はく才法をすれ  
 命とかくして遠く蒼溟とてくる事と佛法と  
 傳へて邊土と利をむかうと名をりてい帝の師と  
 りてうとも我本懐少のぼとせ給ひある  
 帝勅ありて師の法をまよとて法滅ふ理ふ道まり  
 我もむまに及ぶに朕が年十でふかうを以てあり  
 願と一節のち佛意と給せんて任仰と奉  
 東縁を契とてむひて菩提子の念珠とてまふ  
 せ給ひありあうのちまふは賞賜と給ふまは  
 善くありと見くより彼の念珠といふふ東寺よと

まふまふ

大師城中法巡接し給ふはひと流水のちりふ  
 法がみ給ふと違の髪みでまて肩はまをり  
 かく星夜の夜やみまてくひざぶはをりまは給  
 童子一人出来てとひくまをりまを云く和尙は是  
 日本法に筆上人能大師養てのちまはくま  
 かり童子はくまをり河をばま流氷小字と書給  
 らんやと大師別うまが詞ふまをりて清氷と瀟  
 不詩と書給ふと文悲みまをりて流下あり  
 童子まをりて見く屢感嘆の氣あり童子又我



文乃紀下等和尙見之自入べしとて其かひち水乃  
 人小跡とて一字と切記事至文字う切びあは  
 まて流る事形一但右小跡とてす大師是  
 と見ていふは點とば非と一給へるやと回給ふ  
 多す流ふなりとて次で伴の點と付ると記此字  
 響と非と一光とて向ふとて其跡と向りて空と  
 けりり小記爰小彼童我とて是文殊ありと云て  
 切記事十極より世にたり後衣とて璽格ありと  
 けり是大師の手書とてあはれみむとて大聖文殊  
 きたるまゝとてひ事形ありとておろしや在唐の

流水點字

文殊菩薩  
 童子と現  
 大師の書法  
 試み

圖



其二



行狀記卷之四

三十四



行狀記卷之四

三十五

同く名のどく名の不思議一おろくは或ハ犬と飛  
鬼と法うひ或と多比と見葉と母と母と母と  
法ぶさよ記きくふいとまのりくず

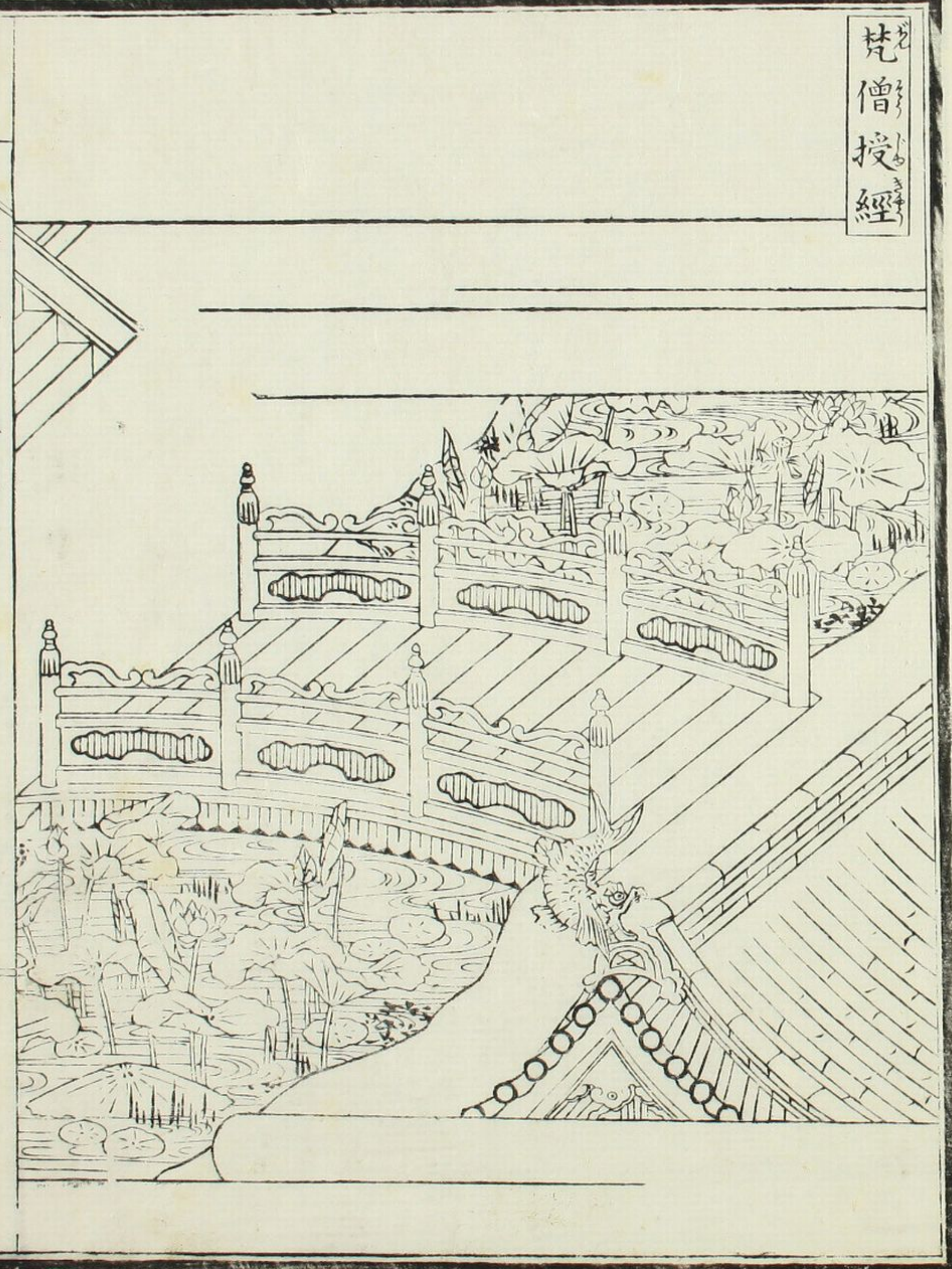
大師在唐は時中夏邊州の間おろくはびてあは  
福く顯密の名法よすみくく二花の奥區試尋  
廣く親儒は散道に訪てお明の幽致と死を先  
給入中おも長安醴泉寺にまはし時まは  
おろく殺若牟尼室利蘇小南天の婆羅門あま  
お湯して義淵の法源と伺ひ法味の甜苦と法  
一給入彼牟尼之花と中印度那爛陀寺一第

餘僧の継統より殺若三花と法智菩薩の取り  
して瑜伽の大教と学び交ひ親び喜薩今釋南  
天よ見立し給て秘密の法輪と轉し給入面見  
三十許の如きして至年九百餘歳りおろくは  
肯おれと給りまはれ其言の甘露と嘗ましして  
不老の驗益とえくまへる事おろくはくはくは

又三花大師お告まらして若生縁ハ蘭實玉あり  
少年より道入又天と法と法とりとひ常り  
傳燈と誓てける小糸りおろくは星志くおろくは東海

小縁こゑんかくして志願しげん遂すぐるまは縁えん恨うらみむ今澤いまやくも  
 ころ縁えんの花はな波なみ羅ら密みつ經きやう未ま及およ貝かい葉えふ乃な梵ぼん蓮れん  
 三さん口くち和わ尚しやう本ほん玉ぎよくふりあさりて信しん長ちやう宣せん揚やう志し給ぢふ願げん  
 祈いのちのほろろ縁えんと被おほ玉たま結むすて元もとと接せつ湫しゆ湯たうん  
 と好このまふり東隅とうぐうの序しよ域いきりよとつども西土せいどの  
 高たか徳とく也や志しをふさぐ免めんて知ちぬ吾われ邦くにハ是こゝ大おほ宗そう  
 お願ねがの佳境きやうきやうかまといふこと成なり  
 又また越こ別べつの節度せつど使し中丞ちゆうじやう大だい都と督とくハ一時いつじの大才だいさいあり  
 あれとき免めんて蒙かと披ひ以い生せい以い濟せいべれものいづく  
 也や祈いのちがましくハ遠方えんぱう小流せうりゆう竹ちやくき免めんてと法ほふ給ぢふひ

梵僧授經



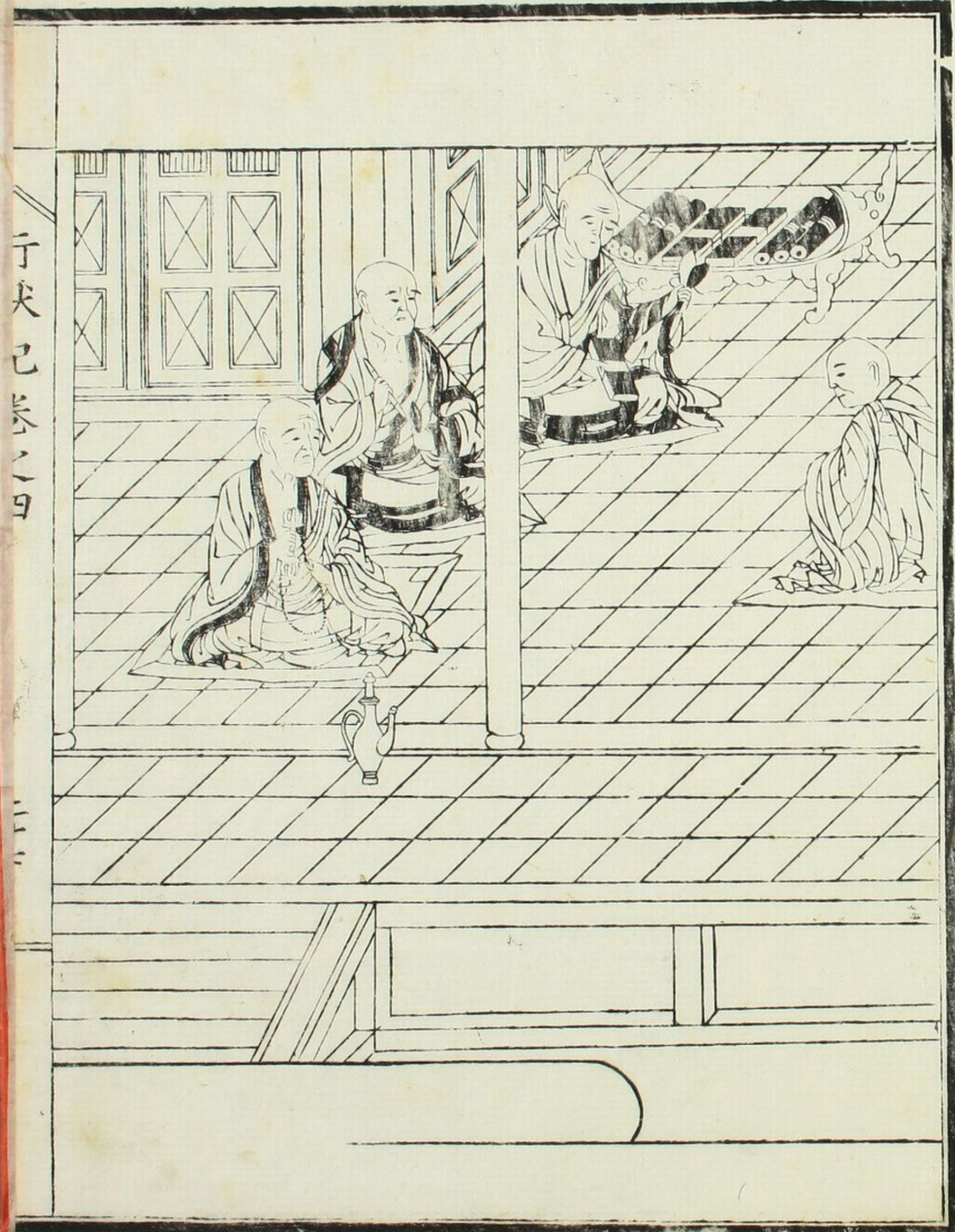
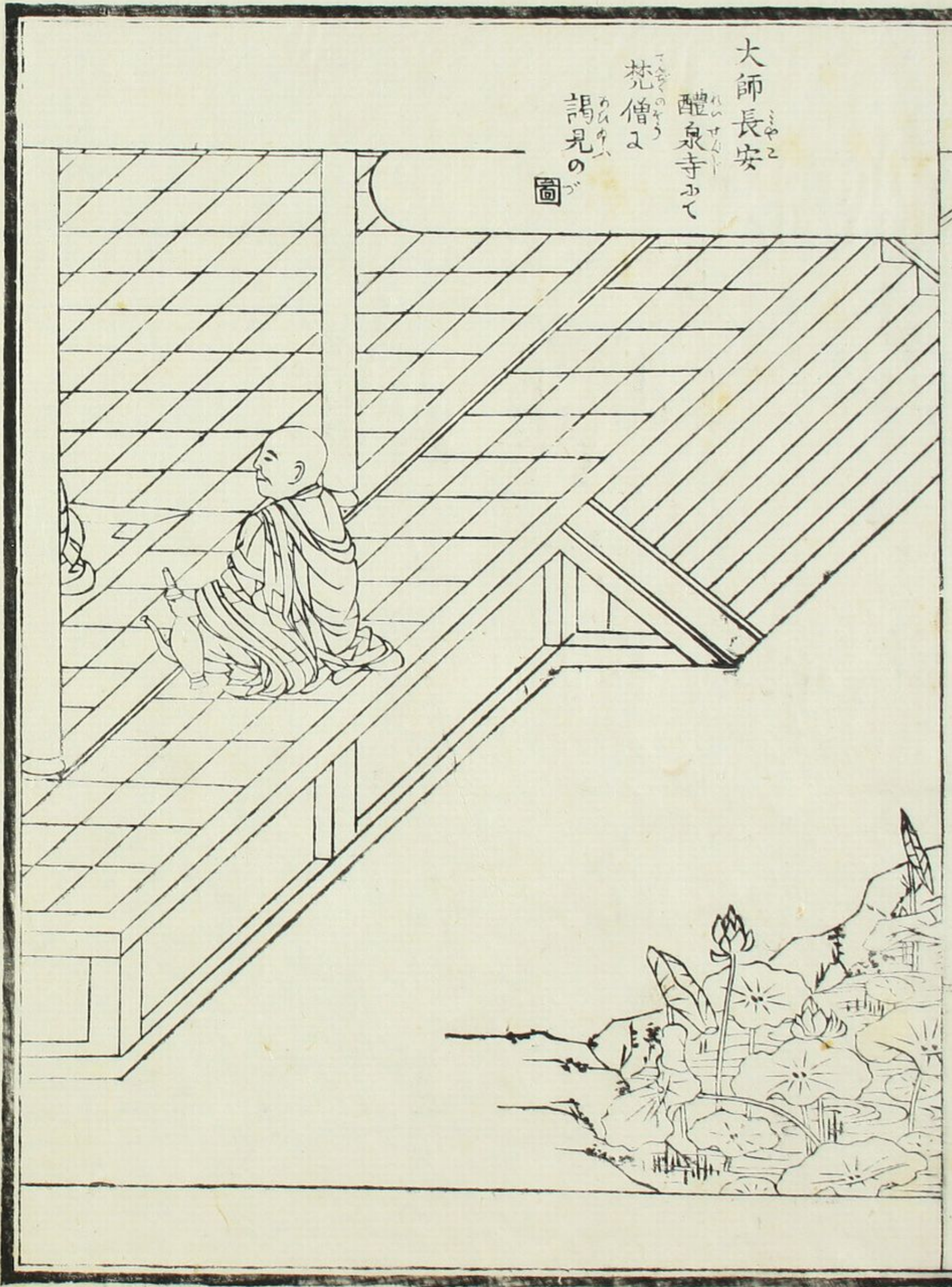
大師長安

醜泉寺にて

梵僧よ

謁見の

圖



一經論傳記抄きんろんでんしきしやうとび詩絨碑銘しじゆひひト醫いの内外ないがいの  
 教法きやうほう印海いんかい多おほりくと先得せんとくと身み入いるま凡おほ日く車くとままり  
 かくく發はつ却てつとまままにせまま事こととおげげるる容よう  
 の書畫しやうが典籍てんせきの繕ぜん写しやちちりり紙し法ぽうトト人にん成せい修しゆ  
 衣え法ぽうととふふ節せつ食じき寝ねと忘わす給たまへへるる十じゆ年ねん功こう是しと  
 四し運うんふふかか保ほ三さん密みつ法ぽう中ちゆう法ぽうと一いつ志しふふ法ぽうととぬぬききと  
 の多おほまま人にんとと

弘法大師行狀記卷之四終

